

# 近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡

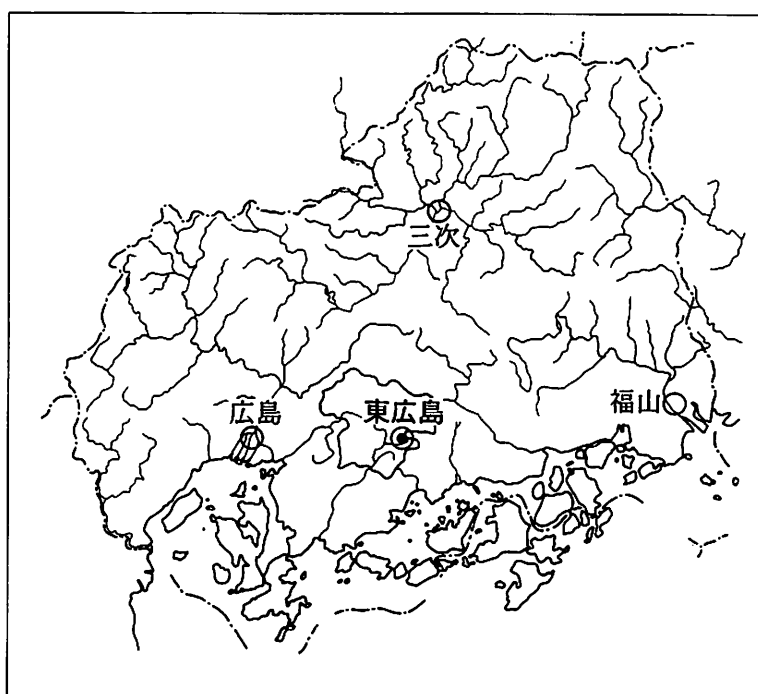
東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

2003

財団法人 広島県教育事業団

# 近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡

東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（2）



遺跡位置図（●が遺跡）

2003

財団法人 広島県教育事業団



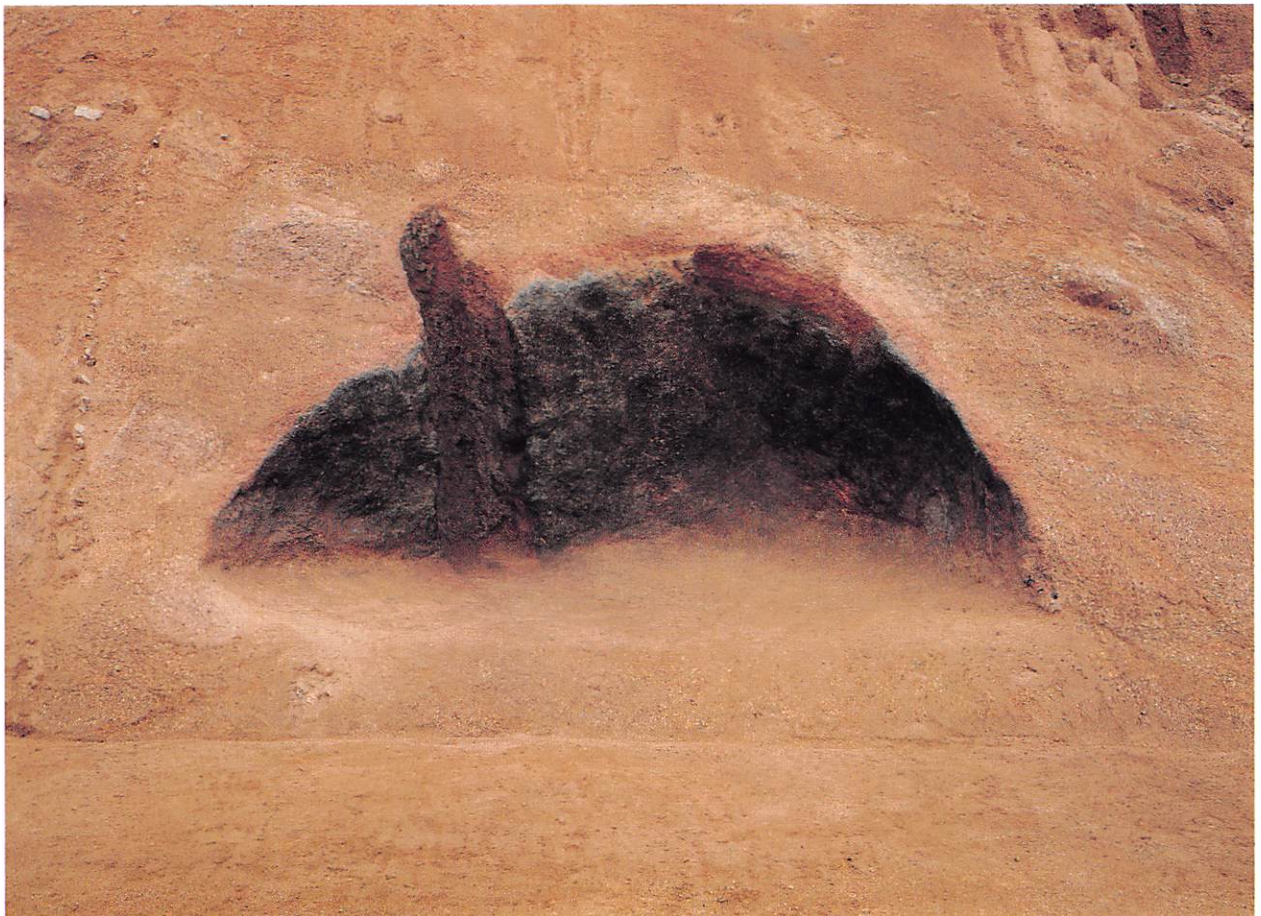
a 近世山陽道跡（西から）



b 日向一里塚（西から）



a 日向一里塚・北塚（南から）



b 石立炭窯跡（南から）

## 例 言

- 1 本書は平成12（2000）年度，平成13（2001）年度および平成14（2002）年度に調査を実施した東広島呉自動車道建設事業に係る近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡（東広島市西条町上三永所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国土交通省中国地方整備局広島国道工事事務所（旧建設省中国地方建設局広島国道工事事務所）との委託契約により，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は次のものが担当した。  
平成12年度 辻 満久（現・財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室），  
出野上 靖（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）  
平成13年度 三原 稔宏（現・広島県立賀茂高等学校），辻  
平成14年度 濱岡 才二（現・熊野町立熊野中学校），辻
- 4 出土遺物の整理・復原・実測，図面の整理，写真撮影は辻が主として行った。
- 5 本書の執筆・編集は辻が行った。
- 6 報告書の作成は平成15年4月1日に財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの業務を引きついで財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が行った。
- 7 遺物の番号は挿図・図版とも同一である。
- 8 遺物の縮率は陶磁器・土器類は1：3，石器は2：3，古銭は実大とした。
- 9 石器の石材は考古地質学研究所 柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。
- 10 本書に使用した挿図の方位は第2図が真北，他は磁北である。
- 11 第2図は国土交通省国土地理院発行の1：2,5000地形図（田万里市）を使用した。
- 12 石立炭窯跡は当初は石立窯跡と呼称していたが，調査の結果炭窯である事が判明したので石立炭窯跡とした。

## 本文目次

1	はじめに	1
2	位置と環境	3
3	調査の概要	6
4	遺跡と遺物	8
	(1) 近世山陽道跡 (西国街道跡)	8
	(2) 日向一里塚	11
	(3) 石立炭窯跡	18
	(4) 出土遺物	20
5	まとめ	31

## 巻頭図版目次

1 a	近世山陽道跡 (西から)
b	日向一里塚 (西から)
2 a	日向一里塚・北塚 (南から)
b	石立炭窯跡 (南から)

## 挿 図 目 次

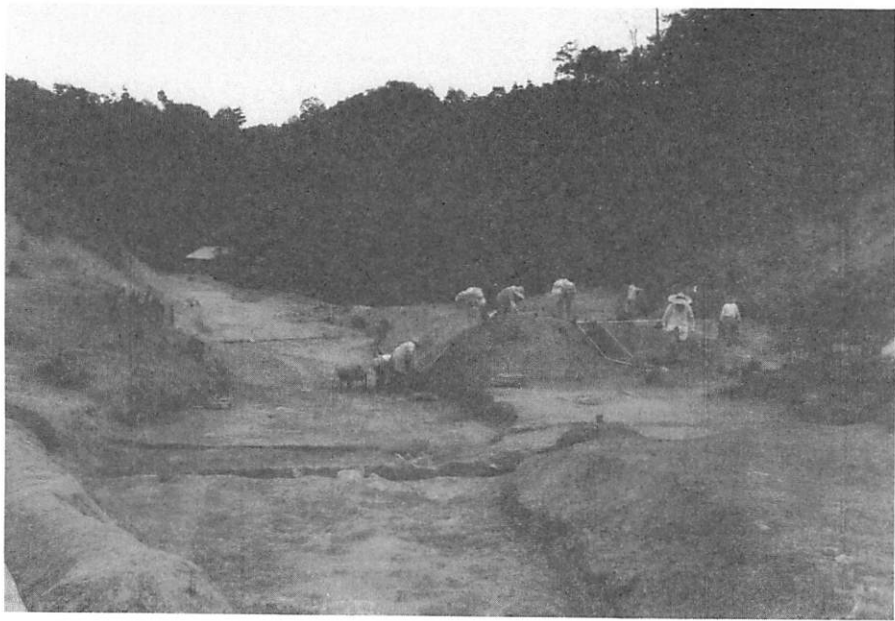
第1図	東広島呉自動車道路線図	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1:2,5000)	4
第3図	遺跡周辺地形図 (1:2000)	7
第4図	調査区位置図 (1:1000)	8
第5図	道路測量図 (2000年度) (1:300)	9
第6図	道路測量図 (2001年度) (1:300)	10
第7図	道路測量図 (2002年度) (1:300)	11
第8図	一里塚地形測量図 (1:200)	12
第9図	北塚墳丘測量図 (1:80)	13
第10図	北塚墳丘土層断面図 (1:80)	14
第11図	北塚墳丘下測量図 (1:200)	15
第12図	南塚墳丘測量図 (1:80)	16
第13図	南塚墳丘土層断面図 (1:80)	17
第14図	石立炭窯跡実測図 (1:60)	19
第15図	出土遺物実測図 (1) (1:3)	20
第16図	出土遺物実測図 (2) (1:3)	21
第17図	出土遺物実測図 (3) (1:3)	23
第18図	出土遺物実測図 (4) (2:3)	27
第19図	出土遺物実測図 (5) (2:3)	28

## 表 目 次

表 1	土器観察表	.....29
表 2	石器計測表	.....30

## 図 版 目 次

図版 1 a	近世山陽道跡2000年度調査前（西から）
b	同 上 検出状況（西から）
c	同 上 検出状況（東から）
図版 2 a	近世山陽道跡2001年度調査前（南から）
b	同 上 検出状況（東から）
c	近世山陽道跡2002年度検出状況（東から）
図版 3 a	日向一里塚調査前（北から）
b	同 上 北塚調査前（南から）
c	同 上（東から）
図版 4 a	日向一里塚北塚検出状況（南から）
b	同 上（東から）
c	同 上 調査風景（南から）
図版 5 a	日向一里塚北塚検出状況（北から）
b	同 上（南西から）
c	同 上（南東から）
図版 6 a	日向一里塚南塚調査前（北から）
b	同 上 検出状況（北から）
c	同 上 石列検出状況（北から）
図版 7 a	石立炭窯跡現状（南から）
b	同 上 検出状況（南から）
c	同 上 煙道部（南から）
図版 8 a	石立炭窯跡 煙道部（南から）
b	同 上（南から）
c	同 上 完掘状況（南から）
図版 9	出土遺物（1）
図版10	出土遺物（2）





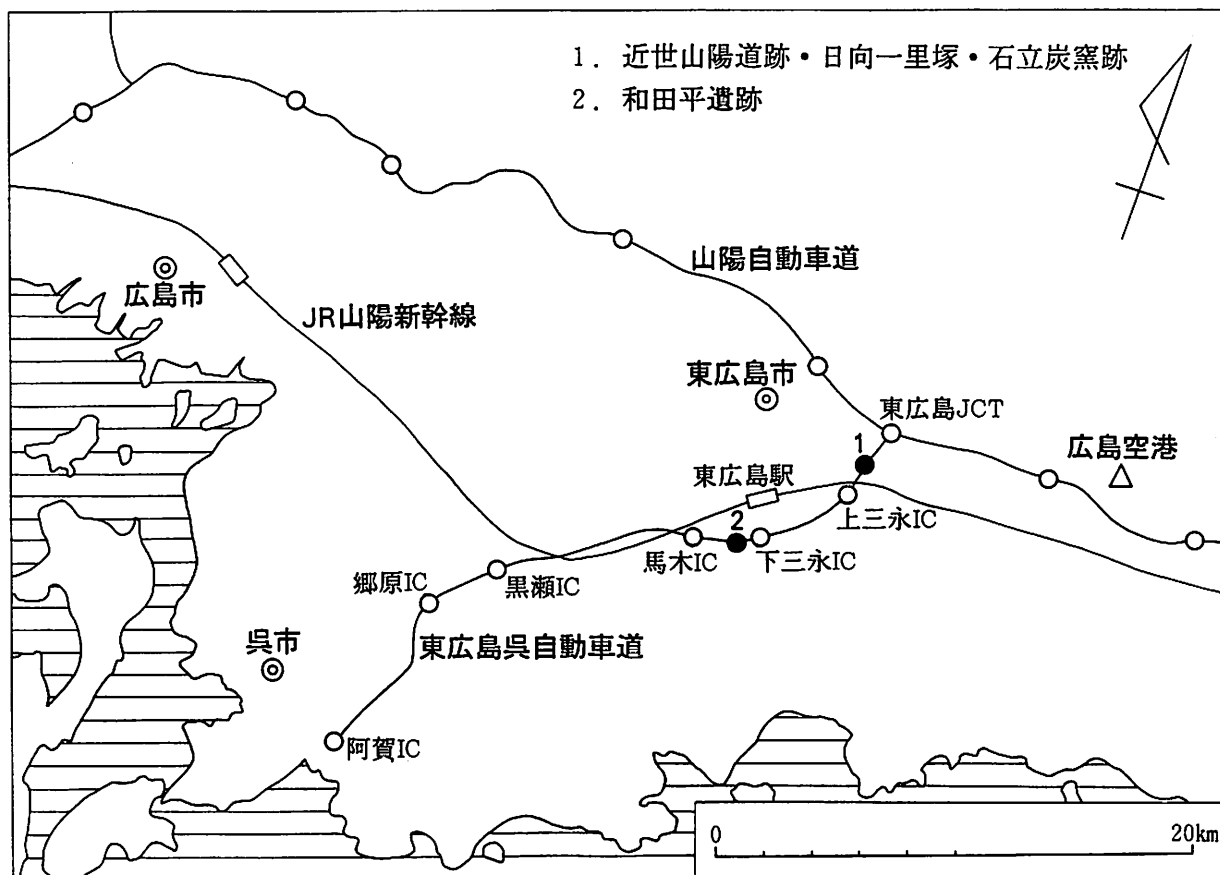
# 1 はじめに

本報告書は東広島呉自動車道建設事業に係る近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡の発掘調査報告である。

東広島呉自動車道は、「ゆとりある地域社会」の実現をめざし、全国の都市・農村地区から約1時間以内に高速ネットワークに到着できるように整備される高規格幹線道路のひとつで、山陽自動車道の東広島市高屋町溝口を起点とし、終点の呉市阿賀中央五丁目に至る、延長32.8kmの自動車専用道路である。

昭和59（1984）年、本線沿線にあたる東広島市・呉市・竹原市・賀茂郡黒瀬町は、豊田郡安芸津町と共に広島中央テクノポリス地域に指定され、地域産業の技術高度化先端技術開発の拠点を目指して関連企業の進出や住宅開発が進んでいる。また、近年の都市化に伴い、一般国道375号線など沿線の主要道路の交通渋滞が頻繁に発生するようになり、新たな幹線道路の整備が必要とされるようになった。本道路の完成によって、沿線の各市町間や芸南地域各町から、山陽自動車道・広島空港・新幹線東広島駅などへのアクセス向上が期待されている。

平成元（1989）年8月、建設省は東広島呉自動車道の基本計画を決定し、平成3年12月、東広



第1図 東広島呉自動車道路線図（JCT・ICは仮称）

島JCT（仮称）・馬木IC（仮称）間の整備計画・施行命令を出した。平成7年2月、建設省中国地方建設局広島国道工事事務所（以下「建設省」という。）は東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）に東広島県自動車道建設事業地内における文化財の有無等及び取扱いについて協議した。これを受けて、現地踏査を実施した広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は、同年7月、上三永・馬木間に3遺跡及び要試掘箇所25箇所が存在する旨回答した。その後、県教委は要試掘箇所の試掘を順次行い、平成10年に近世山陽道跡・日向一里塚が存在する旨を建設省に通知した。建設省と県教委・市教委はこれらの遺跡の取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達し、事前に発掘調査による記録保存を図ることとなった。平成12年3月に建設省から県教委へ調査依頼があり、県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）が発掘調査を行うことが適切であると通知した。

工事との絡みで遺跡の中央部における工事用仮設道の横断が避けられないことから、調査は3回に分けて実施した。平成12年度の調査は工事用の仮設道に伴う盛り土が及ばない東側の部分＝日向一里塚を含む1280㎡が調査の対象で、調査期間は平成12年7月24日～10月27日の約3ヶ月間である。また工事中に発見された石立窯跡の調査も合わせて実施した。平成13年度の調査は平成12年度調査区域の西側に隣接した部分＝平成12年度に工事用の仮設道で土盛をしていた部分の調査である。調査面積は800㎡で、期間は平成12年8月27日～10月5日の約1.5ヶ月であった。最終年度の調査は平成14年11月11日～12月27日の2ヶ月で、調査面積は920㎡である。初年度の調査では市教委と共催で遺跡見学会を開催し、約260名の参加があり、県内初の一里塚の調査であったため非常に盛会であった。本報告書は以上のような経過をへて実施した近世山陽道跡（西国街道跡）・日向一里塚・石立炭窯跡の調査成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料としてまたこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば望外の喜びである。

なお、発掘調査にあたっては、建設省中国地方建設局広島国道工事事務所（現国土交通省中国地方整備局広島国道事務所）、東広島市教育委員会及び地元の方々に多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。



## 2 位置と環境

### (1) 地理的環境

近世山陽道跡（西国街道跡）・日向一里塚・石立窯跡が存在する東広島市は、広島県のほぼ中央部に位置しており、賀茂台地の南側に当たる西条盆地を中心に高屋・志和の両盆地とその周囲の山々からなる。西条盆地の東は低い山稜を挟んで竹原市との境となる峠となり、賀茂川およびその支流である田万里川と呉市水源地に注ぐ三永川の分水嶺となっている。

盆地の標高は200～250mで、盆地を囲む山々は400～600mである。東西23.5km、南北22.5kmで面積は288.45km<sup>2</sup>の菱形をしている。瀬戸内沿岸部に比べると比較的冷涼な気候をしている。

昭和49(1974)年に賀茂郡内の八本松町・西条町・志和町・高屋町の4町が合併して市制を施行した東広島市では広島大学の移転を機に人口増加が著しく、学園都市構想や中央テクノポリス構想等による都市基盤の整備や交通アクセスの整備などに伴う発掘調査によって地域の歴史が次第に明らかになっている。かつての田園風景が急速に変貌を遂げている地域の一つである。

### (2) 歴史的環境

ここでは本遺跡周辺の遺跡の状況について概観してみることにする。ただし本遺跡の存在する西条盆地東端付近では開発がそれほど顕著に実施されているわけではないので、断片的な資料に止まっており、詳細については不明な部分が多い。

全体的な遺跡の分布としては中央部を国道2号線が東西に走っており、これを取り巻くように遺跡が分布している。遺跡は中世以降のものが多くを占めている。以下時代順に概観する。

#### 旧石器時代

市域全体を通じても散発的で、広島大学キャンパス周辺の調査で比較的まとまって出土しているにすぎない。上三永地区ではニッ掛遺跡で旧石器が表面採集されている程度である。

#### 縄文時代

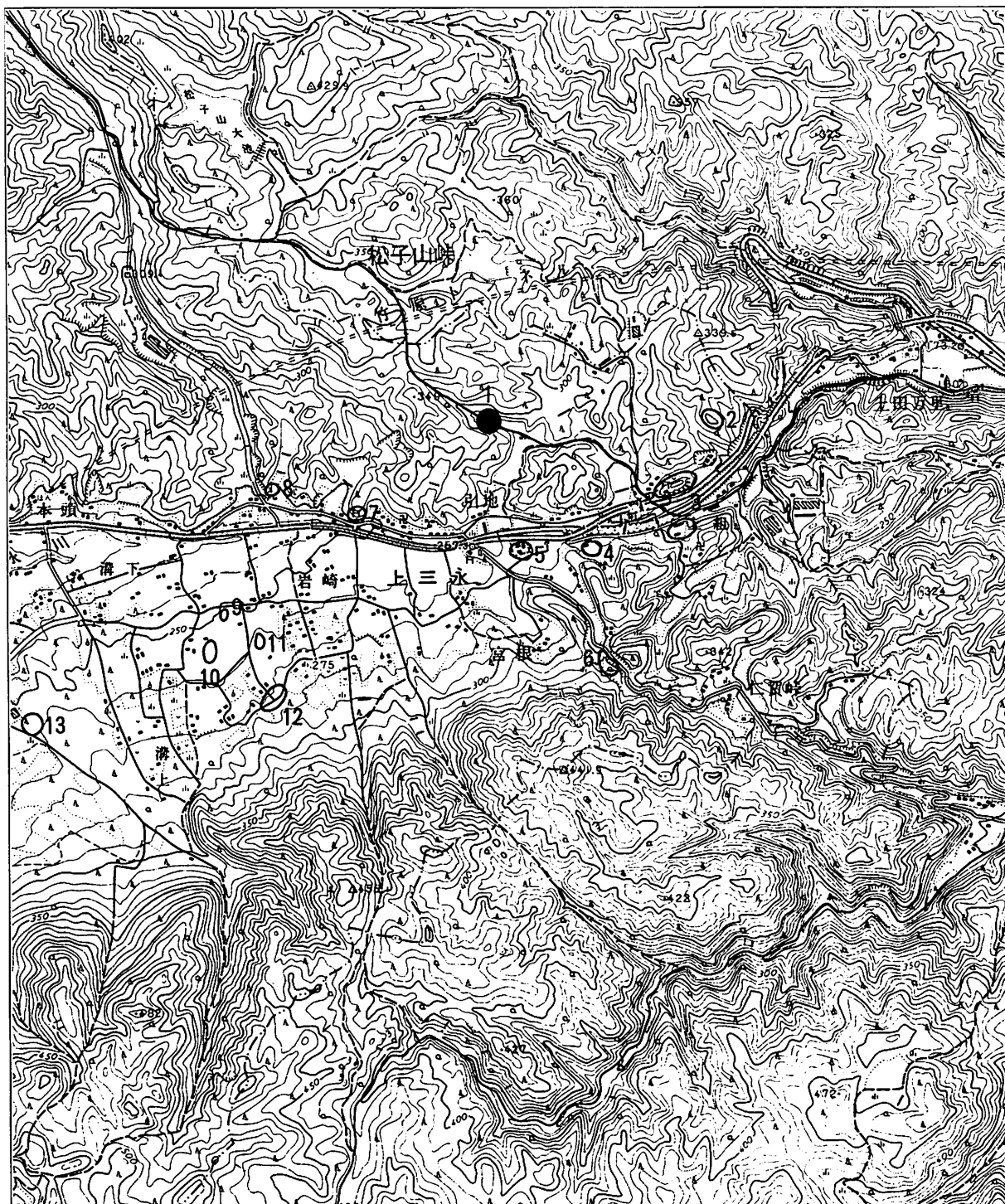
旧石器時代と同様に遺跡は少ないが、<sup>かみふけ</sup>上泓遺跡<sup>(1)</sup>で縄文時代後期末の土坑と土器さらには早期に属すると思われる石鏃が検出されている。

#### 弥生時代

近年まで不詳であったが、平成11(1999)年の吉光谷遺跡の発掘調査では弥生時代後期から古墳時代にかけての大規模な集落跡が見つかっている。竪穴住居跡や掘立柱建物跡にまじってL字状に溝が巡る6×15mの敷地内に梁行3.2m、桁行8.2mの2間×3間の建物跡が検出され、その性格ともあいまって当地域の拠点的な集落の様相を呈している。

#### 古墳時代

確認された遺跡は少ないが、前述した吉光谷遺跡のほかに、簾古墳などが存在する。簾古墳は昭和59(1984)年に発掘調査が行われ、箱型石棺を埋葬施設とする直径10m程の円墳で、出土遺物から5世紀の前半頃の所産と推定されている。



1. 近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡
2. 念剛岩遺跡
3. 峠城跡
4. 上泓土居屋敷跡
5. 荒谷土居屋敷跡
6. 向井池遺跡
7. 呉水源地南側窯跡
8. 簾古墳
9. 上溝上1号遺跡
10. 上溝上2号遺跡
11. 上溝上3号遺跡
12. 大歳遺跡
13. ニッ掛遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 2,500)

## 古代

遺跡数が若干増加する。呉水源地北側窯跡や五楽1号遺跡などの須恵器・瓦の窯跡や祭祀遺跡と考えられている念剛岩遺跡、岩崎神社遺跡などがある。近年の調査により荒谷土居屋敷遺跡・正着谷遺跡で奈良・平安時代の須恵器が、吉光谷遺跡では平安後期の八稜鏡が出土している。

## 中世

盆地の東端部に睨みを利かせるかのように遺跡が配されている。峠城跡は国道2号線で分断されているが、おおむね丘陵先端部に位置していると推測でき、東端の郭が最も高い場所にあり、西に向かって順に郭が配される。居館と考えられているが詳細は不明である。

上泓土居屋敷跡は平坦面が二段あり、上段は南側に下段は西側に土塁が残っている居館と考えられていたが、近年圃場整備事業に伴い周辺の調査が実施されて新たな知見が得られている。上泓遺跡は上泓土居屋敷跡の東側に隣接する水田部分の調査で、この水田部分と屋敷跡の関係が注目された。報告者によれば「上泓土居屋敷跡は、南が高く、北に一段下がる上下2段の郭からなる土居屋敷跡と考えられていたが、今回の調査によって中央が高く、南北に一段ずつ腰郭を持つ構造が明らかになった。3郭からなり、背後に空堀を持つ小規模な山城といえ、上泓城跡と呼称するのが適当である。」すなわち屋敷跡ではなくて山城跡であると結論付けている。

荒谷土居屋敷跡は高さ約5m・一辺約55mの土塁を方形に回し、南側に出入り口がある居館跡である。土塁の外側にはこの土塁を取り囲むように堀が巡る。数回にわたり発掘調査<sup>(3)(4)</sup>が実施されていて、出土遺物は近世陶磁器を主とするが、中世の土師質土器・瓦質土器・常滑焼などが出土している。近年の屋敷跡隣接地の調査で、堀の一部と近世前期の屋敷地を検出している。屋敷跡自体が一辺50m程の方形居館であることを考慮すると堀が相対的に大きいので、先の上泓土居屋敷跡＝山城跡との関連を考慮しつつ軍事的要衝としての当該地の重要性が指摘されている。

## 近世

近世になると田万里から峠城跡を通り、石立－松子峠－四日市へと通じる西国街道が東端を掠めるように整備され、五街道に次ぐ脇街道として主要な街道の一つとなってゆくのである。このルートは明治になり国道2号線が新たに開設されるまで使われる事となる。

## 註

- (1)財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター 『上泓遺跡・荒谷土居屋敷遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第25冊 2000年
- (2)東広島教育委員会 『簾古墳発掘調査報告書』 1985年
- (3)東広島教育委員会 『荒谷土居屋敷跡発掘調査概報』1981年
- (4)広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター 『荒谷土居屋敷跡発掘調査概報』1980年

### 3 調査の概要

第1章で記述したように、本遺跡の調査は3年次にわたるものである。近世山陽道跡（西国街道跡）とこれと一体不可分の関係にある日向一里塚、更には工事中の発見で窯体の一部が残っていた石立炭窯跡の調査を各々実施している。以下に概要を記述する。

#### （1）近世山陽道跡（西国街道跡）

近世山陽道跡の調査はルートに直行するように試掘坑を設定して掘り下げを行った。この試掘坑の土層観察を元に、道の往時の姿の検出に努めた。土層観察では複数回の拡張や修復の後が確認できる部分もあるが、それらは面として捉えるには余りにもその広がり狭かったため、今回の調査では各試掘坑ではほぼ共通して観察できる土層の特徴を手がかりとして面的な広がりを追及することとした。ただし、結果として後世の改変や改修あるいは破壊等により消失した部分と往時の姿を留めている部分が混在する。これは道という性質上いたし方のないところであろう。

調査の結果、近世山陽道跡は石立付近では日向一里塚を境として東側が緩やかな平坦地、西側が坂道になっており、全体としては北側の山裾に沿って造られていた。調査部分での長さは149m、幅3～4.5mであった。これは『芸藩通志』に記載されている西国街道の道幅2間半という記述とほぼ一致する。また、道路に付随する溝や石畳などは検出できなかったが、西側の坂道の部分では道に平行する土塁状の高まりを確認できた。

若干量ではあるが、江戸時代の所産と推定できる遺物（陶磁器・古銭）が出土している。いずれも遺構から分離した状態で出土しているため遺跡に伴うものかどうか不明であるが、時代を窺う傍証とはなろう。

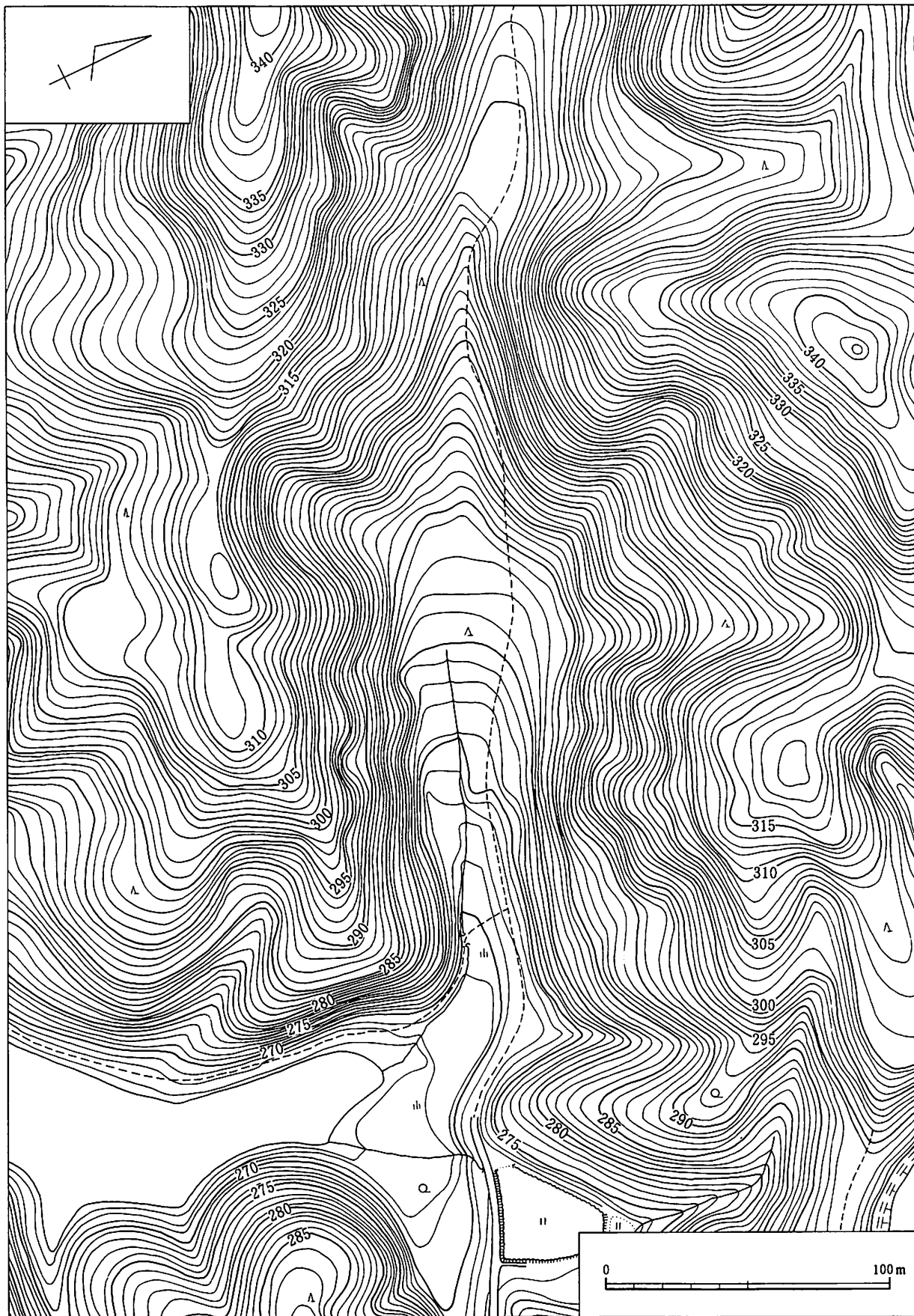
#### （2）日向一里塚

近世山陽道の脇に位置する塚である。北側と南側にそれぞれ1基ずつ配されており、2基一組で一里塚を構成している。北側の塚（以下、北塚という）は直径約6m・道路からの高さ約2.5mの平面形が円形の塚で、外周に沿って列石が貼り巡らされている。中央部に陥没痕跡があることからあるいはここに目印の樹木を植えていた可能性がある。一方、南側の塚（以下、南塚という）は4.2×4.6m・道路からの高さ1.5mの平面形が若干歪な円形をしており、一部に列石が残存していた。本来は北塚と同様に列石が外周に沿って貼り巡らされていたのであろう。

遺物は塚の盛土あるいは基底土から縄文時代の土器や石器が出土している。

#### （3）石立炭窯跡

炭窯跡である。工事中の発見のため遺存状況は不良であるが、煙道部分が良好に残っていた。本来の規模については不明であるが、2.4m×1.6mの平面形が長方形の窯跡である。煙道は地山を削り抜いた後に板状の厚みの薄い礫をくみ上げ、この石組みの隙間を粘土できれいに目張りをして造られている。炭化物が出土している。



第3图 遗址周边地形图 (1: 2000)

## 4 遺跡と遺物

### (1) 近世山陽道跡 (西国街道跡)

#### 概要

近世山陽道は摂津・播磨・備前・備中・備後・安芸・周防・長門の八国，東は西宮から西は赤間ヶ関（下関）までのおおよそ600kmを結ぶ街道で，西国街道(この場合は京都を含む)，中国路，九州往還などと称され，幕府直轄の江戸へ続く五街道に次ぐ脇街道として位置付けられていた。

街道自体は中世までの山陽道を基本としその後の都市化に対応してルートの一部を変更させながら整備されてゆく。広島藩内では寛永十（1633）年の江戸幕府巡検使の視察を大きな画期として，領内の道路網が一挙に整備されることとなる。

領内の要地には茶屋を3軒ずつ設け，西国街道の幅は2間半（約4.5m）と定めら，一里塚もこのときに造られている。領内の西国街道沿いの一里塚は35箇所を設置され，それぞれに松・杉・榎などが植えられていた。この他に街道沿いに並木も造られている。

街道沿いの宿駅には高屋，神辺，今津，尾道，三原，茅市，四日市，海田市，広島，廿日市，玖波の11箇所があった。この中には本陣や茶屋を有する宿駅もある。

茶屋は当初広島藩内では二十五箇所建設されていたが，享保初年では西国街道沿いには四箇所，領内合せても九箇所になっている。他のほとんどは維持費の過重が原因で廃されている。調査地点の北西約6kmには宿駅でかつ茶屋もある四日市が存在する。

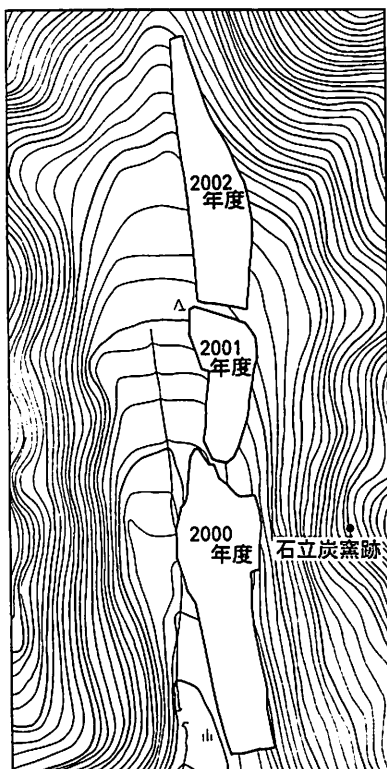
このように当時の幹線道路として機能しており，現在の国道2号線の基礎となっているのである。

#### 現状

調査地点付近の近世山陽道は明治以降に幹線となるルートが上三永の盆地内を通るように変更したので，主要な幹線道路としての使用は終了する。このことが幸いにも街道の多くが改良や拡幅で面影すらなくなるほど改変されるなかで，現在まで比較的良好に往時を偲ぶ縁を残す一因となったのである。

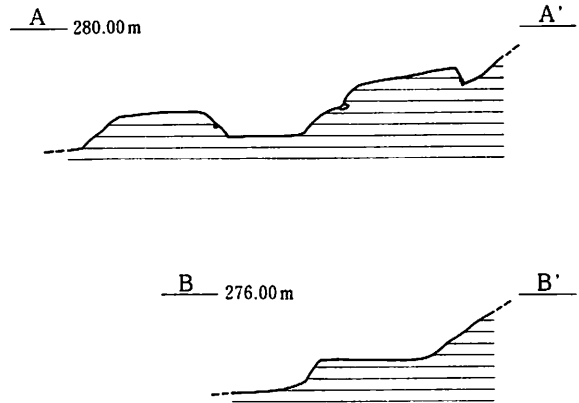
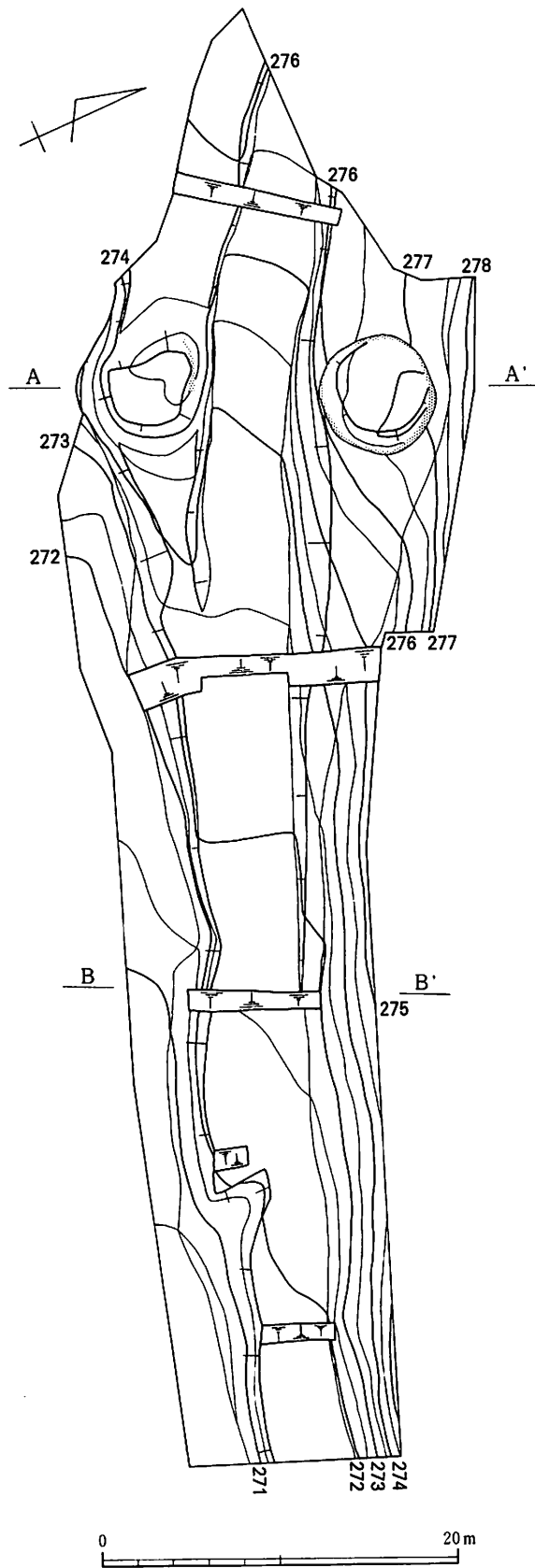
調査地点を含む周辺の近世山陽道は後世に若干の改変や改良が行われてはいるものの，現状で見ると比較的良好な遺存状況が良好であった。ただし，近年の山林の放置に伴い街道跡の一部に雑草が生い茂ったり，巨大な倒木が横たわっていたりと崩壊の速度が進んでいるような印象を受けた。

特に平成14年度の調査区の西側（松子山峠への登り道）ではかつての街道跡に自然流水の痕跡が縦横に入っており，街道の一部が完全に崩壊し，何の方策もないままに放置されていた。



第4図 調査区位置図 (1:1000)





反対の方向すなわち平成12年に調査した地点の東側は若干拡張されている可能性はあるものやや幅広の畦道として利用されており、当時の街道の姿を止めており、往時の状況を髣髴とさせるに十分である。また、当時のこの街道を歩いた旅人や通行人が見たであろう風景が残っている錯覚を覚える。

ただし、ここでも東側の民家の周辺でかなりの部分が改良されており、面影の多くが消失の方向に向かっている事に違いはない。

特に調査地付近では東からのだらだらとした緩く傾斜しているものの平坦な道路と西側比較的急勾配の坂道がちょうど接する地点に当たると。

#### 堆積状況

道路は基本的には表土を剥ぐと硬い層と軟らかい層が互層になって堆積していた。特に平成12年度の調査区ではこの傾向は顕著で、やはりこれは道路が平坦部にあたり、山道と化した平成14年の調査区に比べると遺存状況が良い事によるものであろうと思われる。

また、道路は山側を削って、谷側に盛土をするという方法で造られている。さらにこの

第5図 道路測量図(2000年度) (1:300)

盛土を叩き占めながら堅固な路面にしたものと思われる。

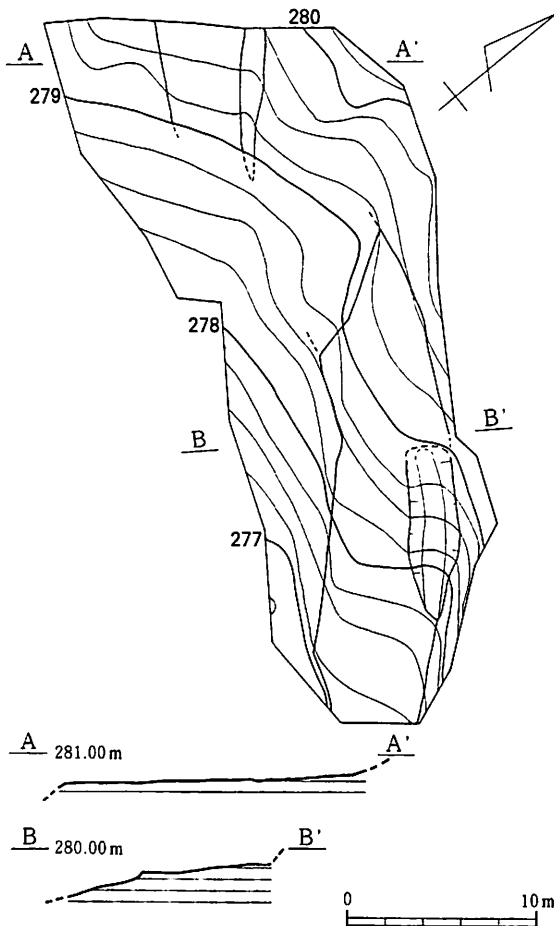
### 各調査区の状況

平成12(2002)年度 (第7図・図版1)

平成12年度はほぼ平坦で一里塚付近ですこし勾配がかかる長さ約76mについて発掘調査を実施した。道路はおおむね西-東に向いており、幅は狭いところで3.9m広いところで5.1m、さらに一里塚付近では4.5mとなっている。なお、一里塚の周辺では道路はわずかに北よりに緩くカーブしている。北側の山の斜面は急峻で、角度が概ね一定している事などから、本来このような勾配であったのかどうかは不明であるが、一部については人為的に削平されたものと思われる。

一里塚付近の平坦面については、時代を示す出土遺物は確認できなかったものの、一里塚・道路との関係からこの道路に伴うものと考えられる。ただし、建設当時から存在したかどうかは確認できないが、平坦面を作り出す労力と周辺の状況を勘案すれば、その可能性は極めて高い。

道路には排水溝や石敷きといった設備は特になく、路面を搗き固めて整地している。また、道路の使用に伴う轍などの凸凹や補修部分については面的に捉える事ができなかった。



第6図 道路測量図(2001年度) (1:300)

平成13(2001)年度 (第8図・図版2 a, b)

平成13年度の調査は平成12年度の調査の西側部分にあたる。一里塚から坂道にかかる28mについて発掘調査を実施した。道路の幅は場所によって少し違うが、4~4.5mであった。道路は東-西方向に伸びているが、調査区の中ほどで南に緩くカーブしている。中央部から西側部分が崩壊していたので道路の状態については不明な部分が多い。道路の北側=山側に小さな溝を検出したが、出土遺物などから近代のものと思われ、街道に伴う施設とは言い難い。なお、北側=山側は前年度調査で判明したように同じような勾配で急峻に削平されている。

前年度調査区の周辺=東側の道路下で縄文時代の土器・石器を検出している。これらの遺物は道路と無関係の遺物で、道路建設に伴い縄文時代の遺跡が破壊された可能性がある。

平成14(2002)年度 (第9図・図版2 c)

平成14年度の調査は平成13年度の調査のさらに西側の部分になる。本格的な坂道にかかる45m

について発掘調査を実施した。道幅は一定していないが、平坦部分よりは少し幅狭の2.1~3.4mとなっている。道路は東-西に伸びており、調査区の中央部やや東側で緩く南にカーブしている。

高さ0.3~0.7mの土塁状の遺構が道路の南側に並行しており、坂の傾斜が緩くなる東側で自然地形に移行して消滅している。土塁の段面は場所によって一定していないが、おおむね台形状ないしは蒲鉾状をしている。道路の南側の端が土塁状遺構の北側の端となっている。

この土塁状遺構は前述したような状況から本道路に伴うと考える事ができ、北側斜面を削平した時の残土や道路を平坦にした際の土砂を利用して盛土をしたものと考えられよう。

遺物は表土から近世の陶磁器類が出土している。いずれも、遺構から分離した状況での出土であるが、時代を傍証する資料にはなろう。

## (2) 日向一里塚

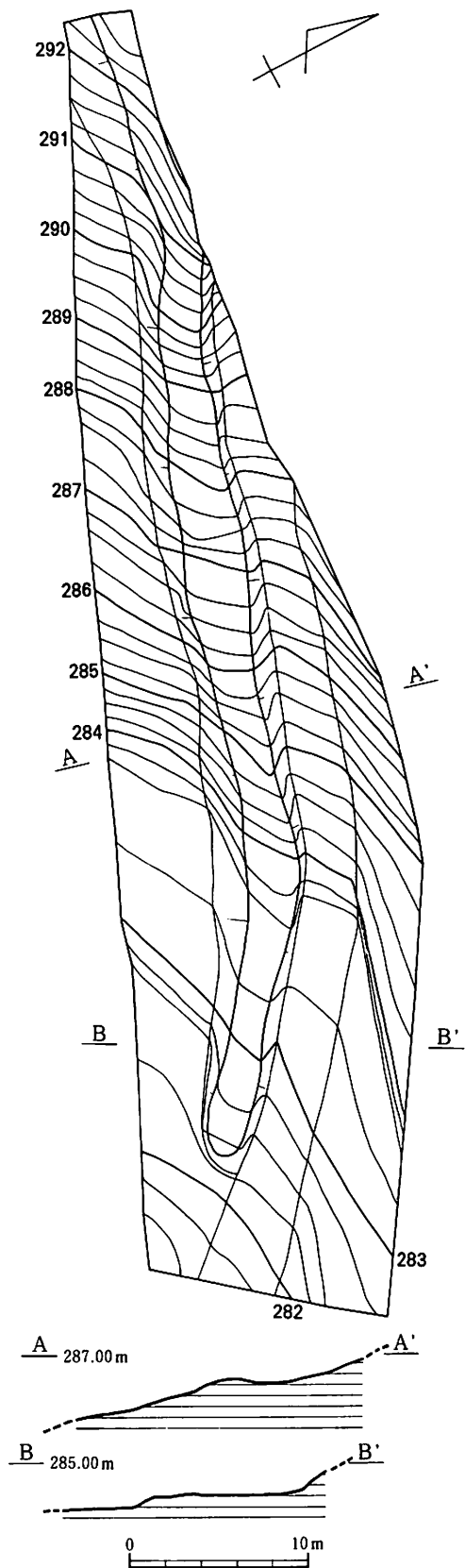
### 位置 (第7, 10図・図版3)

本遺跡は西国街道沿いに位置する。周辺は雑木がうっそうと生い茂る山林となっている。国道2号線のルートが上三永を東西方向に走るように変更されたので、一里塚も西国街道もすっかり様変わりしており、塚の周辺の街道跡は山道と化していた。

一里塚は前述したように二基一組で構成されており、位置的には竹原から続く上り坂が一旦平坦になり再び松子山を越える上り坂になるその丁度傾斜の変換点に位置している。道路の状態としても絶好の位置に目印として存在していることになる。

また、塚の周辺には道路に沿って狭いながらも平坦な部分が存在し、これらが道路に付随する場所として何らかの用途に使用されたとも考えられる。

調査は塚の中心部を基点として設定し、二つの塚の基点を結んだ線を基線とし、各々の塚の基点からこの基線に直行する線を設けて、塚を四分割した。そして、この基線と基線に直行する線に沿っ



第7図 道路測量図(2002年度) (1:300)

てトレンチを設定し、おのおの土層を確認しつつ掘り下げを行った。

## 北塚（第11図・図版3～5）

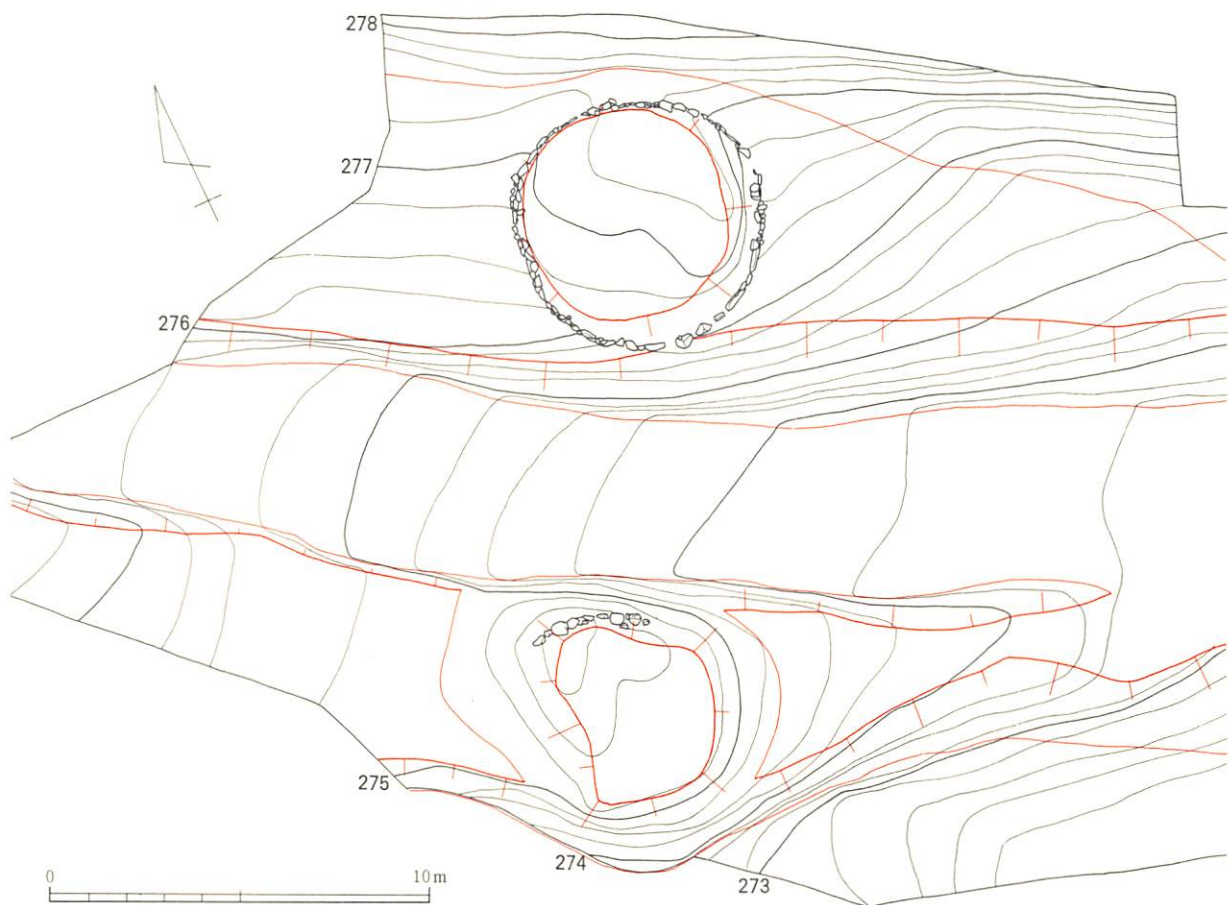
### 現状

雑木を片付けて表土のみとした状態での規模は6.2m×6.5m、高さ1.5mの方形ないしは長方形の平面形をした塚であった。墳頂部には松などの目印となったような大木や礫などは確認できなかった。また、周溝などの区画もなく、単に土を盛り上げて若干の整形をしたものと思われた。

頂部が少し平坦になっているが、この平坦部分が往時も存在したかどうかは不明で、後世に造られた可能性も否定できない。いずれにしても現状観察の限りではそれほど大きな改変が行われたとは思えなかった。

### 墳形と規模

前述したようにトレンチの掘り下げを実施した結果、当初予定していた方形ではなく、直径6.2m・高さ1.7mの円形の平面形をもつ土饅頭のような塚であることが明らかとなった。さらに、この平面形に合わせて鉢巻き状に礫を2～3段積み上げて巡らせていた。



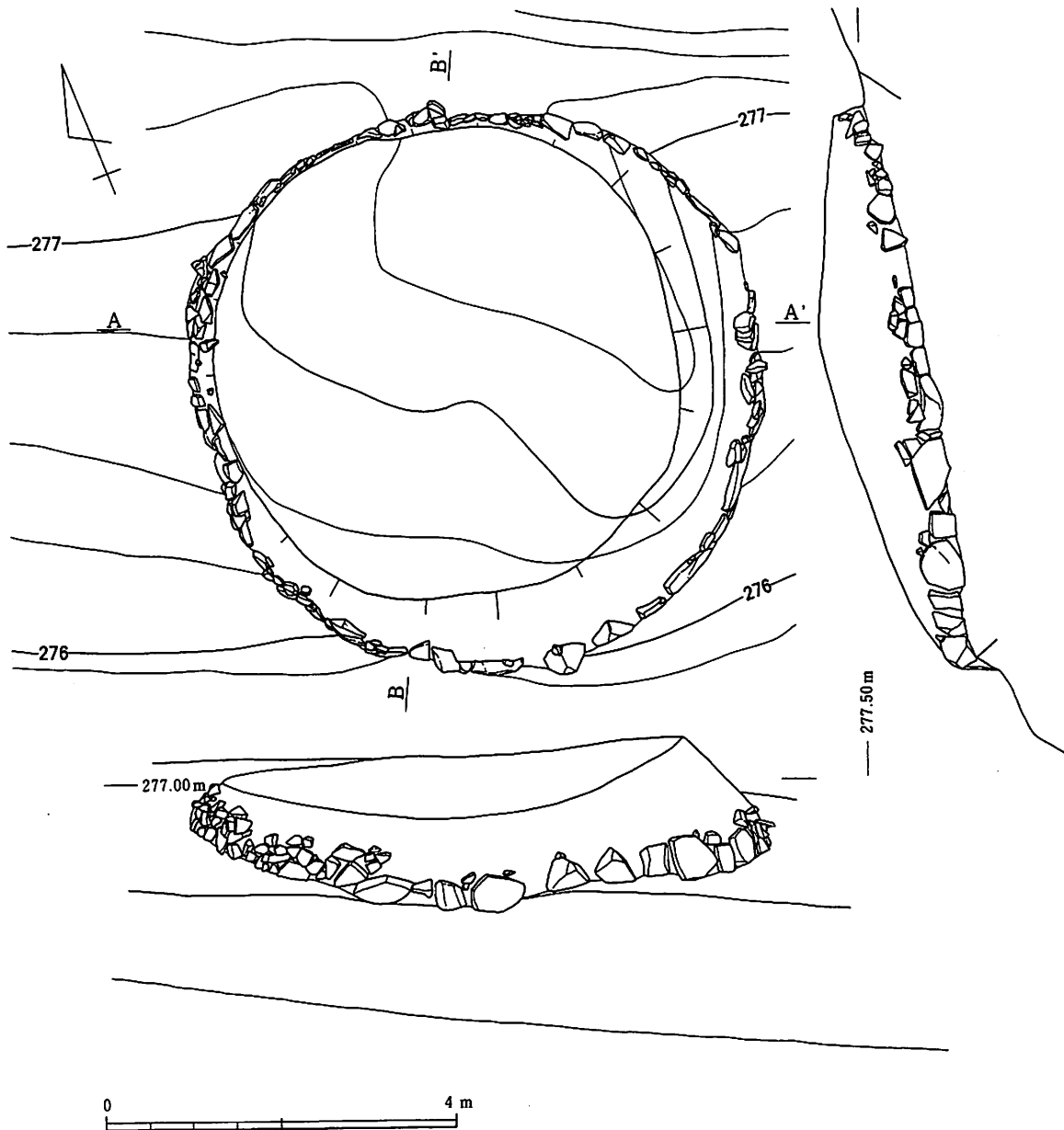
第8図 一里塚地形測量図(2002年度) (1:200)

この礫の中心と現状での中心は少しずれており、一里塚として使われなくなってから、かなりの量の土砂が堆積し、特に山の高い側と接する位置に当たる北側部分は完全に墳丘が埋没していた。

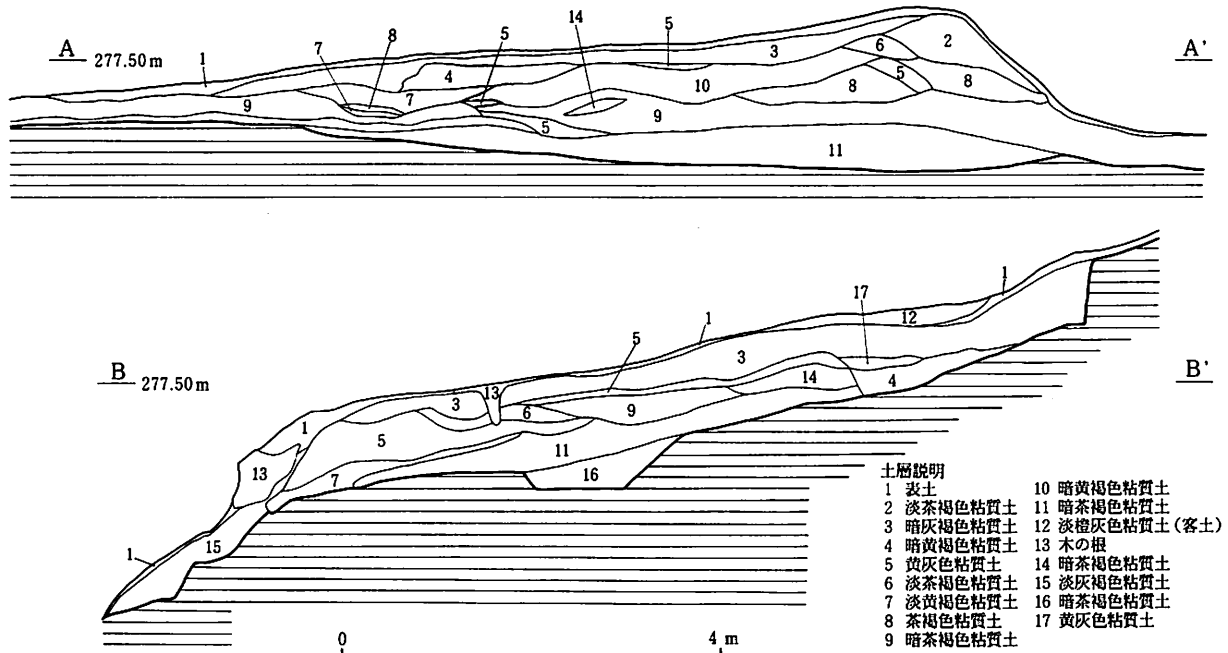
**盛土**

塚はおおむね平坦地に土盛りをして造られている。黄褐色粘質土を基底にしてそこから上に2mほど盛り上げている。およその構築の順番はまず、塚の境を石を巡らせてこの基底となる石列を中心として土盛りをする。土盛りの厚さは南側すなわち道路に行くほど厚くなっている。東西方向から塚を見ると北から南にかけて石列が傾斜している様子がよく分る。

これは元の基盤の地形が北から南にかけて傾斜していた事によるものと思われ、水平を意識し



第9図 北塚墳丘測量図 (1:80)



第10図 北塚墳丘土層断面図 (1:80)

て構築しているようではなく、むしろ構築面＝平坦面の傾斜にあわせており、特に道路に面する側は意識的に大きく見せかけるような構造となっている。したがって、塚を東西方から見ると北から南にかけて傾斜している様子が良くわかる。

これらの盛土は周辺の山を削った際の排土を利用しているようであるが、特段このための穴や土取りの跡が見られないことなどから、道路の普請と合せて行ったものと思われる。また、その際に周囲の平坦部も合せて作出した可能性もあろう。いずれにしても、それほど大きな造作をしたとは思わず本来の地形を巧みに利用したものと思われる。

直接、塚とは関係ないのであるが、これらの塚を構築した際に使用した盛土内から、縄文土器が出土した。後述する南塚および周辺の平坦部からも同時代の土器・石器が出土していることから、塚の周辺に縄文時代の遺跡が存在した可能性を強く示唆している。おそらくは、一里塚や道路の建設や整備に伴って大部分が破壊されたと推定できる。

### 貼石

貼石は塚の外縁に沿って全周している。本来は道路からは直接見ることが出来ない北側にまで貼石が及んでいることなどから造りとしては比較的丁寧に造っているものと思われる。

では南側から時計回りに貼り石の貼石の状況についてみていこう。南側の貼石は他の場所で使用している礫に比べて大きな礫を使用している。面の揃った見栄えのよい礫を適度な間隔で配置しており、おおむね基底の石は一段もしくはその上に小礫が組み合わさる構成となっている。底面は北からゆるく南に向けて傾斜している。

西側の貼石は人頭大から拳大の小礫を使っており、南側の貼石に比べると積み方も乱雑である。場所によって欠落などにより石組み本来の姿を止めていない部分も存在するが、現存部分では高

さ50cm程度の石組みを4～5段で構築している。南側の貼石と西側の貼石が接する部分で貼石が面的に乱れている。これはこの部分が崩落して後補した可能性を示すものなのか、あるいはここが起点・終点として構築したので最終的な整合性をとった結果とも考えられる。いずれにしても礫の使用が極端に違っており、貼石の使い方を考える上で示唆的である。

北側の貼石も人頭大の小礫の広口面を外側に揃えておおむね円弧状になるように配されている。基本的には基底となる礫だけで構成されており、高さは20cm程度である。前述した南側の貼石と比べるとこの礫の大きさや貼石の高さがいずれも縮小傾向になっている。やはりこれは道路側からは見えづらい位置（見えない位置）となるので、ある程度簡略化した結果であろうと推測できる。

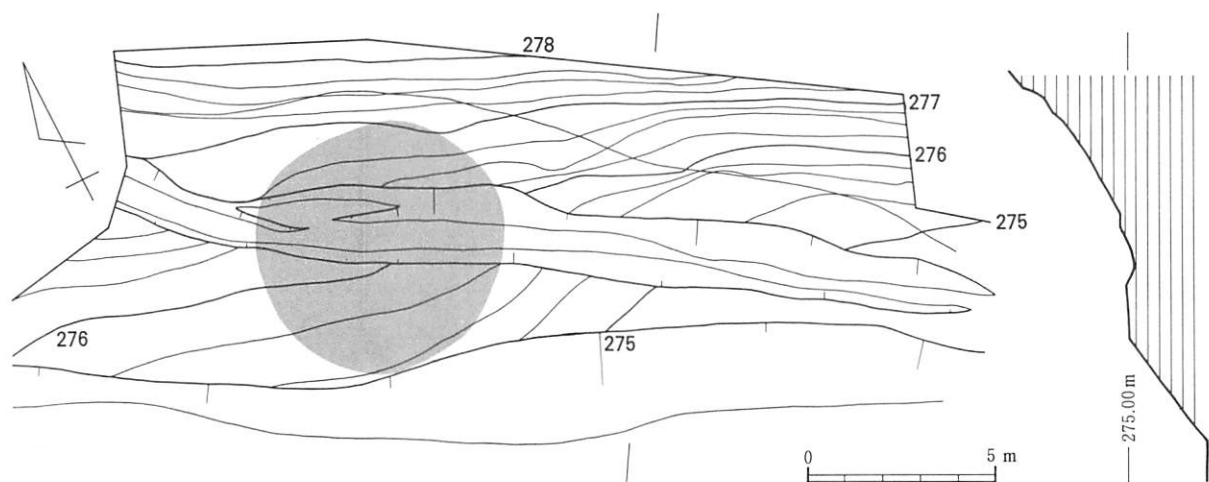
東側の貼石は北側が小振りの礫を使用しているが中央部分から南側になるにつれて大きな礫を使用し、さらに礫の面をそろえている様子が窺われる。北側は20cm程度の高さであるが南側は50cmほどにもなり、この東側の貼り石の状況を見ただけでも、前述したように道路から見える部分と見えない部分で石材の使用法あるいは構築方法が大きく異なっているのが理解できよう。

以上、見てきたように貼石については塚の南北すなわち道路に面するところと面しない場所ではその大きさ使い方などに大きな違いが観察できる。

#### 墳丘下の遺構（第13図）

盛土を完全に除去した後で、盛土の下＝塚の構築面下に溝状遺構を確認した。長さ23m・幅1.4～1.8m・深さ20cmで断面がU字形をしており、道路にやや振れるもののほぼ平行するように東西に伸びている。

性格については不明であるが、あるいはこの付近の西国街道の元となるような道であった可能性もある。遺物は出土していないので、時代を特定できないが、少なくとも一里塚を構築する以前の遺構であるのは確実である。

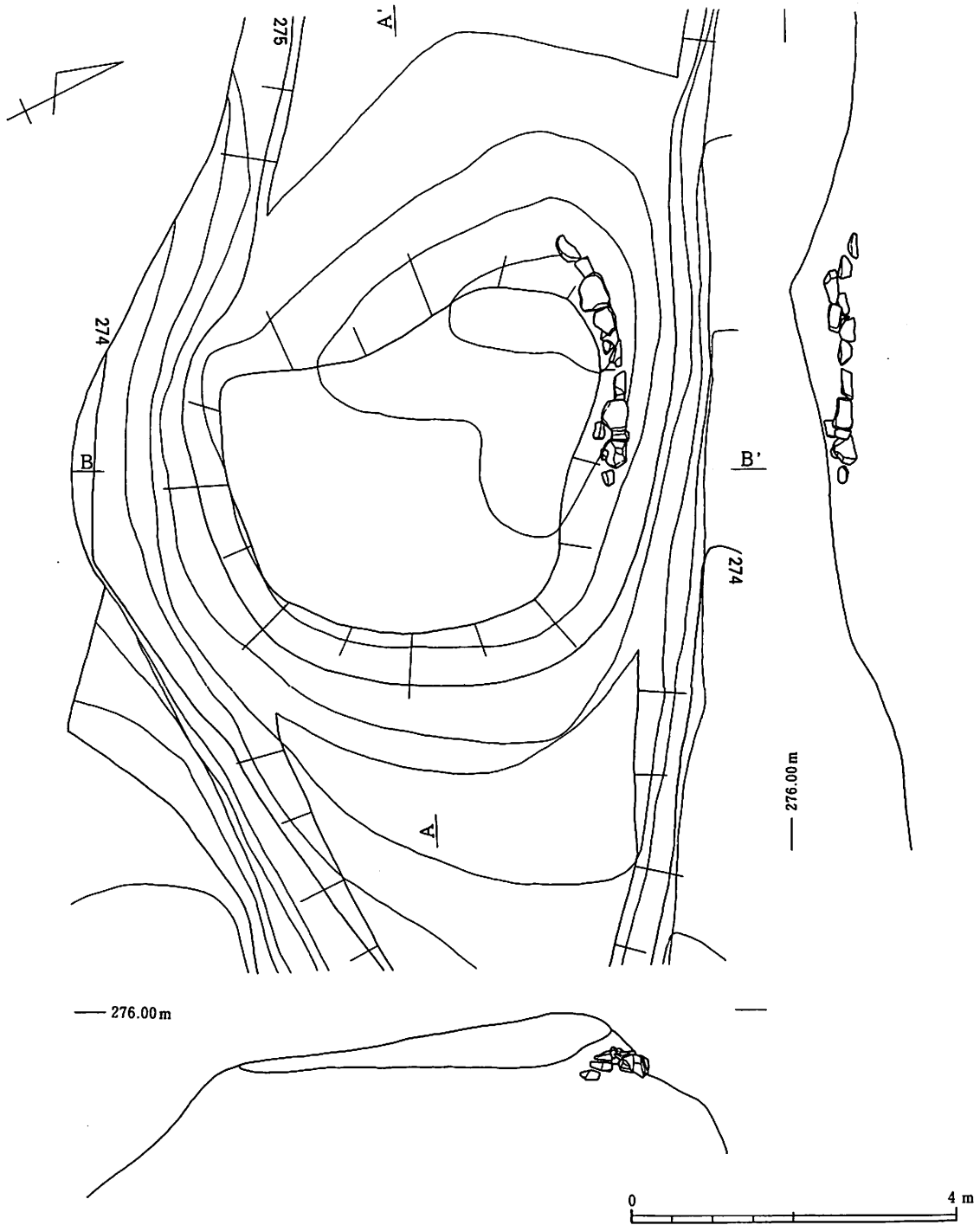


第11図 北塚墳丘下測量図（1:200）

## 南塚（第14図・図版6）

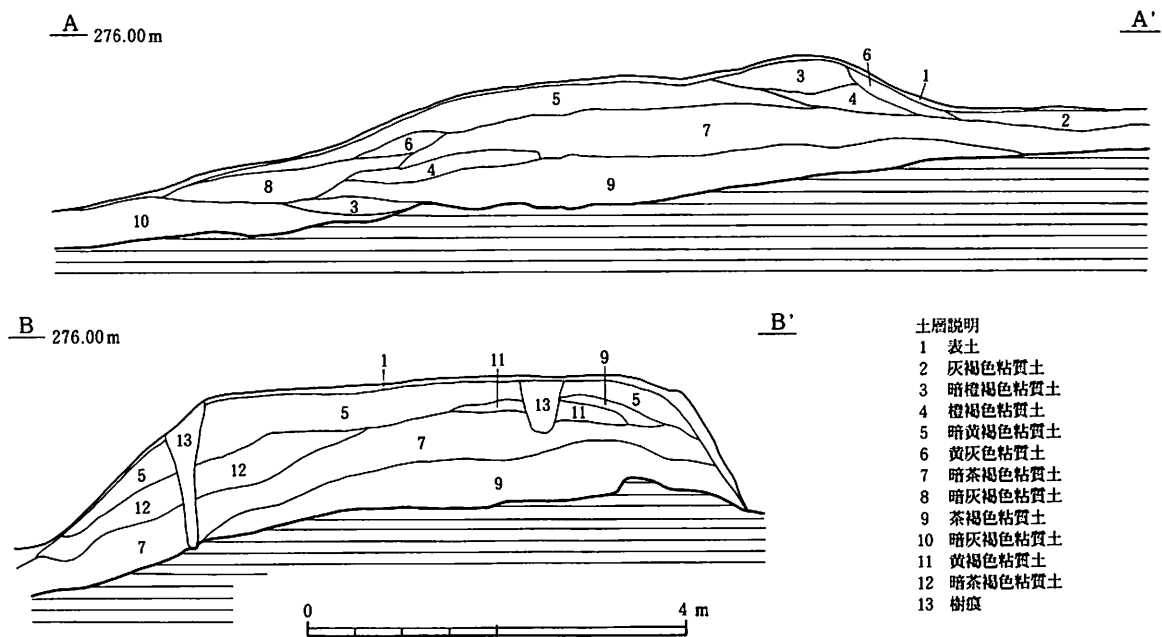
### 現状

北塚同様に雑木等を除去すると一辺が4 m・高さ1 mの平面形が方形を呈する塚のように思われた。ただし、北塚ほど高くはなくて、周囲の平坦面と比べると40cmほど盛り上がっているだけ



第12図 南塚墳丘測量図 (1:80)





第13図 南塚墳丘土層断面図 (1:80)

であった。周溝や貼り石などは表面観察の限りでは見当たらなかった。

#### 墳形と規模

北塚と同様に断面観察用の畦を残して掘り下げをおこなった。盛土の一部が流失しているようで、墳端が東西両方側及び南側では判然としない。土層観察からおおむね直径4mの円形をしていたようであるが、規模的には北塚より一回りほど小さくなっている。本来の規模は流失分を考慮すればもう少し大きかったと思われる。南側は自然流水路へと続き塚の裾が判然としない。

南塚も北塚同様に塚の周りには東側に9m×3m、西側に4m×8mの不定形の平坦面が存在し、これはやはり道路や塚と一体を成す空間であった可能性が高い。この平坦面からも縄文時代の土器や石器が出土している。

#### 盛土

暗茶褐色粘質土をベースとして盛土をしているが、搗き固めたりしたような痕跡は確認できなかった。基盤面からの高さはおおむね1.2mである。北塚に比べると整地面が水平であったためか塚自体の傾きはない。盛土中から縄文土器や石器が出土している。

#### 貼石

北西側の道に面する場所で2.8mほど存在する。塚に使った貼石のなごりと思われ、礫はいずれも小振りであった。石列の配置状況は若干中央部が膨らむものの直線的で、北塚同様に円形に全周していたかどうかは疑わしい。ただし、墳形そのものが前述したように改変されている可能性が高いので断定はできない。

### (3) 石立炭窯跡

#### 立地と現状

本窯跡は本線への取り付け道の法面の掘削工事中に偶然発見されたもので、発見時には法面に焼土・炭化物・窯体の破片などが現れており、一見して窯跡と判断できる状態であった。ただし、法面から煙道部分の上半部が観察できるので、窯体の遺存状況自体は良好とはいいがたく、大部分は工事より既に掘削され消滅していると推測可能であった。

念のため、ボーリングステッキを使って土砂の充満する窯体内を調査したところ、窯の中央部で法面露出部分からさらに奥におおよそ2m遺存していることが確認できた。なお現況から判断すれば本窯跡は南に傾斜する山裾の急峻な斜面に構築されていたと考えられるが、窯体の方向や平面形については法面観察からだけでは詳らかにできなかった。さらにどの程度遺存していたのかも不明である。

#### 調査方法

調査は現状で一番遺存の良い部分を中心として約半分を掘り下げて、断面を観察した後でもう半分を掘り下げるといった方法をとった。すなわち、法面で露出している窯跡をほぼ中央で2分割して、東側半分を先に掘りさげた。ところが、半分掘ってみると、法面と窯跡の主軸にかなりのズレがあることが判明した。

したがって、煙道のある窯の奥の面と断面の方向が一致しない。検出した時点では窯体の奥の状況については未確認であったこと、結果として窯体に対して法面を切る方向がずれていたことなどが影響している。

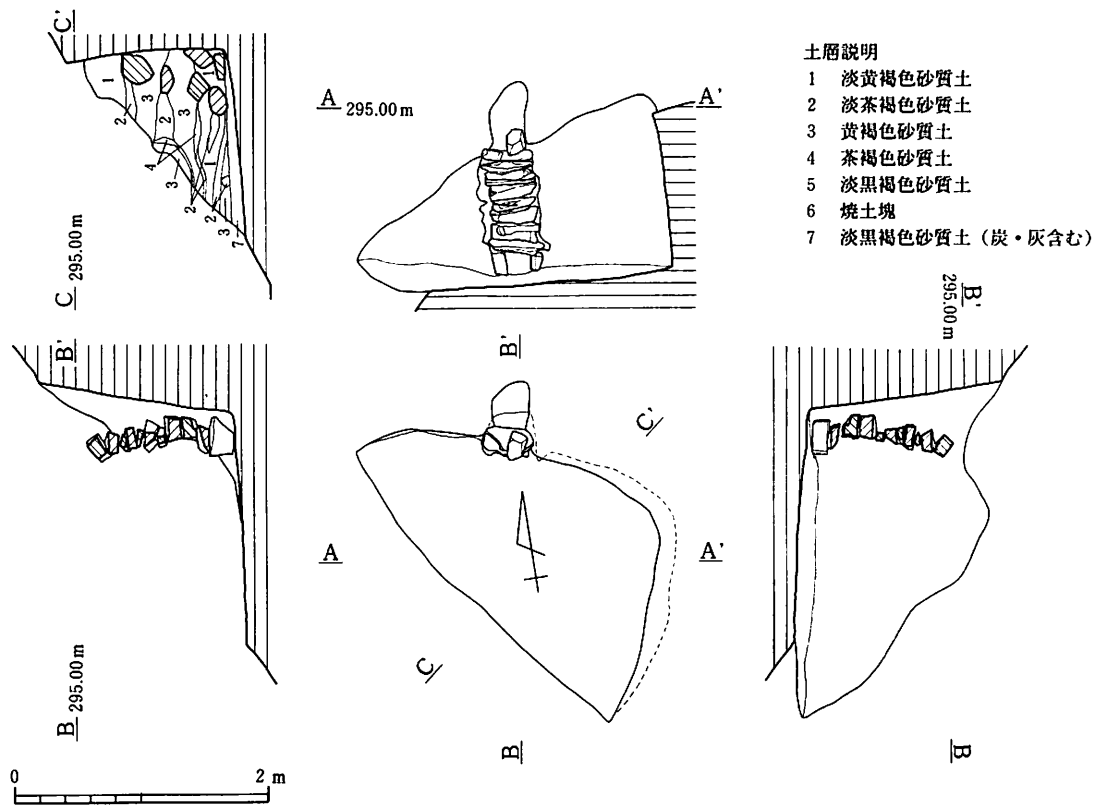
#### 規模

調査の結果、本窯跡は長さ1.6m、幅1.4m、高さ1.6mで、主軸方向N8°30'Eの平面形が長方形を呈する窯跡の煙道部の周辺であることが確認できた。全形については推測の域を出るものではなく、この他の部分についてはすでに消滅している。窯体の隅の状況から判断すると直線的ではなくむしろ若干弧状を呈する事から中央部分が若干膨らむ形状になるものと推測できた。完屈した限りでは基盤土である花崗岩のバイラン土を削り貫いた地下式の窯跡となっている。ただし、燃焼部の状況が不明なので、全てを削り貫いていたかどうかはわからない。

#### 煙道

煙道部は比較的遺存状況が良好であった。窯体の一部を更に溝状に掘り込んでおり、この溝状の掘込みで煙道を形作っている。この掘り込みがなされる部分の反対側には溝を塞ぐように比較的平坦な石材が10数段積み上げられており、各石材の隙間には粘土を充填して煙が窯体内に漏れるのを防いでいる。さらにこの粘土により石材間の凸凹を調整して窯体壁面が平滑になるようにしている。

煙道の最下部すなわち窯体の一番奥と接する部分には煙道部分へ煙を逃がすために、カマド状の横穴を作っている。まず板状の石材の広口部分を向かい合わせに溝の壁に沿うように立て、こ



第14図 石立炭窯跡実測図 (1:60)

の上に同じような板状の石材を架構する。こうして板状の石材三枚を使って窯体内から煙を誘導し排出するための煙口を作る。そして、排出用の煙口ができるとこの架構した石材を基底として前述したようにほぼ直立するように石材を積み上げている。煙道部の高さは1.5m煙道の大きさは0.2×0.4mである。煙を出す部分については破壊されているため不明である。

#### 年代

断面観察では底面付近の炭層の堆積状況から最低二回以上の操業が確認できる。ただし、肝心の窯体の大部分が消滅していることやある時期に天井部が崩落していることなどから、操業回数や窯跡の使用されていた年代などは不明な部分が多い。ただし、同様の構造をもつ窯跡から類推すれば少なくとも中世までには収まるものと思われるが、確定はできない。

#### 性格

同様な構造をもつ窯跡は本窯跡の立地と同様に斜面上に構築される場合が多く、作業用の平坦部（前庭部）、焚き口、炭化室、煙道で構成されている。炭化室の平面形態は長方形や焚き口の部分が窄まる巾着状のフラスコ型、中央部が膨らむ小判型、あるいは羽子板型など様々なバリエーションが存在するようである。本窯跡では平面形は不明であったが、煙道部の構築に礫と粘土を使うなどの特徴的な造りとなっており、これらの事を総合すれば窯跡は炭窯と考えられる。

## (4) 出土遺物

### 1 出土遺物の概要

前章で概観したように、道路及び一里塚の周辺から遺物が出土している。出土遺物の内訳は近世の陶磁器類、古銭、須恵器、縄文時代の土器・石器である。なお、量的には縄文時代の遺物が出土遺物の大半を占めている。

特に一里塚の周辺では盛土や基盤土に近い暗茶褐色土中から縄文時代の土器や石器が多数出土しており、一里塚や道路を建設する際に縄文時代の遺跡を破壊した可能性を強く示唆している。ただし、縄文土器はいずれも小片で全形を窺えるような資料はないが、文様や調整等から縄文時代後期頃と推定できる。

出土地点は1～5は平成14(2002)年度調査区内の表土から、6は南塚周辺の表土、7～111は北塚と南塚の盛土および平成13(2001)年度調査区の東端部分から出土している。

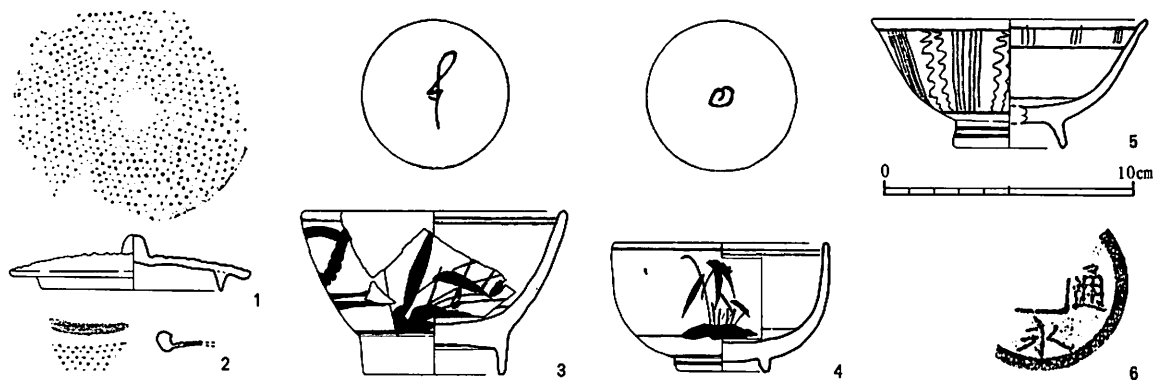
以下、本遺跡に係る時代の遺物から時代順に述べることとする。

### 2 近世

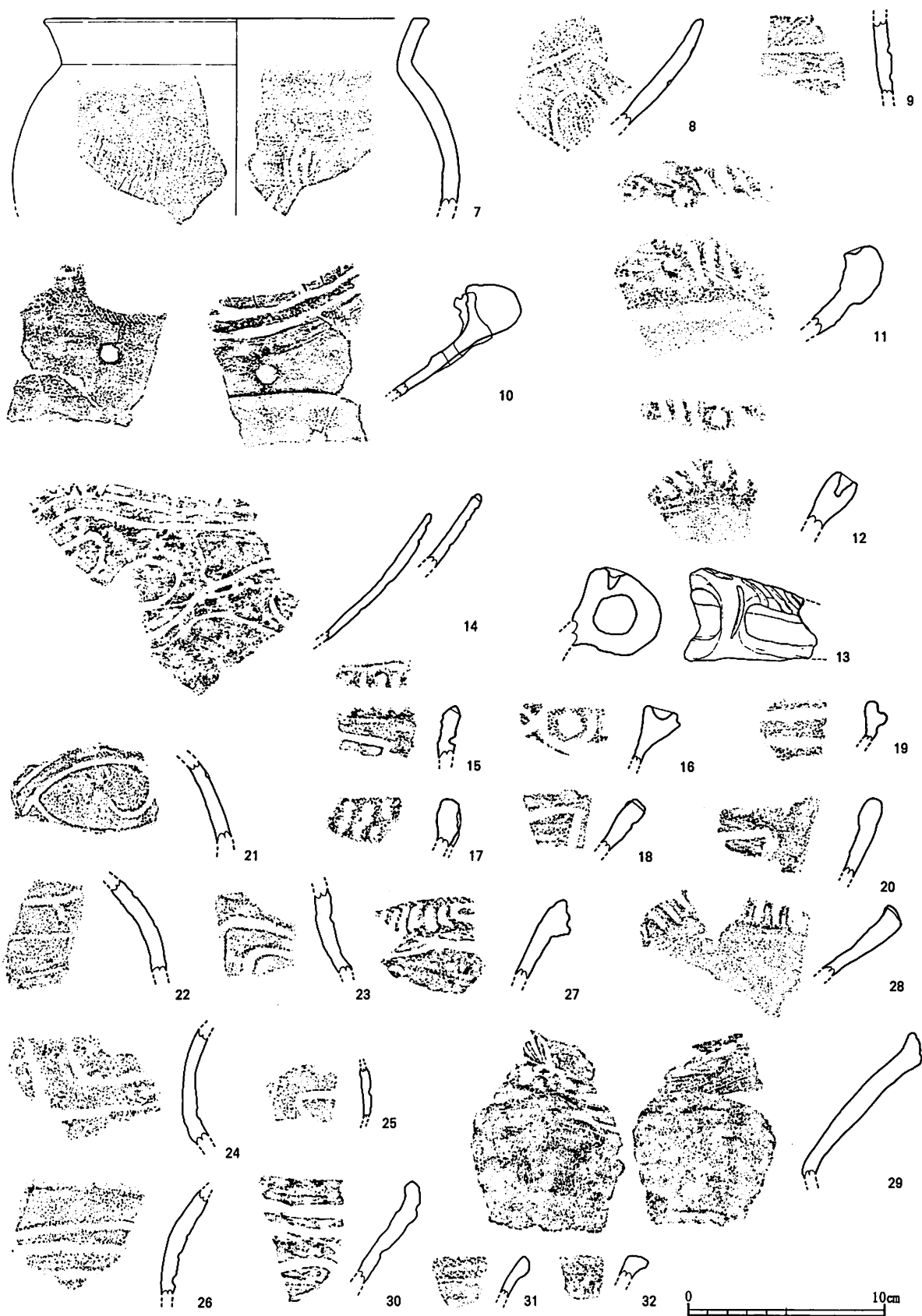
近世の遺物は瓦質の土瓶(1, 2)や陶磁器(3～5)、古銭(6)が出土している。いずれも遺構から分離した状態で出土しているが、遺構の性格を考えると遺物が出土するのは稀なので時期を押さえる補完材料にはなると思われる。

#### 瓦質土器(第15図1, 2・図版9)

1は口径9.6cmかえり径は7.1cm、器高1.2cmの土瓶の蓋である。中央部に断面が台形をなす高さ0.8cm・直径1.2cmのつまみがつく。天井は比較的平坦でそのままにやや尖り気味の口縁端部にいたる。口縁部から0.9cm内側に長さ0.8cmの尖り気味のかえりが垂下する。天井部外面には小宝珠文が押捺されている。小宝珠は1.5～2.0mmである。ところどころに汎形の接合部が観察できる。2は1と同一固体になると思われる土瓶の口縁部である。胴部上半から内傾しながら口縁



第15図 出土遺物実測図(1) (1:3, 古銭は実大)



第16图 出土文物实测图(2) (1:3)

部にいたり、口縁部は外側に丸く肥厚し玉縁をなす。外器面に蓋と同様に小宝珠文を押捺している。

#### 陶磁器（第15図3～5・図版9）

3は復元口径11.4cm、器高6.5cmの染付け碗である。径5.4cm、高さ1.0cmの高台がつく。高台は断面方形で端部は若干尖り気味である。体部は若干外側に開きながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く納めている。外面に草文を描いている。4は復元口径8.4cm、器高5.1cmの染付け碗である。径3.3cm、高さ0.5cmの高台がつく。高台は断面台形で端部は若干尖り気味である。体部は若干外側に開きながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く納めている。外面に草文を描いている。5は復元口径11.0cm、器高5.1cmの染付け碗である。径4.2cm、高さ0.9cmの高台がつく。高台は断面台形で端部は若干尖り気味である。体部は若干外側に開きながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く納めている。外面に柳文を描いている。

#### 古銭（第15図6・図版9）

6は寛永通宝である。半欠け状態で、「永通」の部分だけが残っている。大きさは直径2.5cm程度になると思われる。

### 3 古代（第16図7・図版9）

須恵器が北塚東側の平坦面から一点のみ出土している。7は須恵器甕の胴部上半から口縁部片である。復元口径は19.4cm、復元同部最大径は22.6cmで、緩やかな弧を描きながら頸部に至る。頸部は「く」字形に外反して若干尖り気味の口唇部に至る。口縁は幅狭の端面を持ち、外側に少しだけ肥厚している。

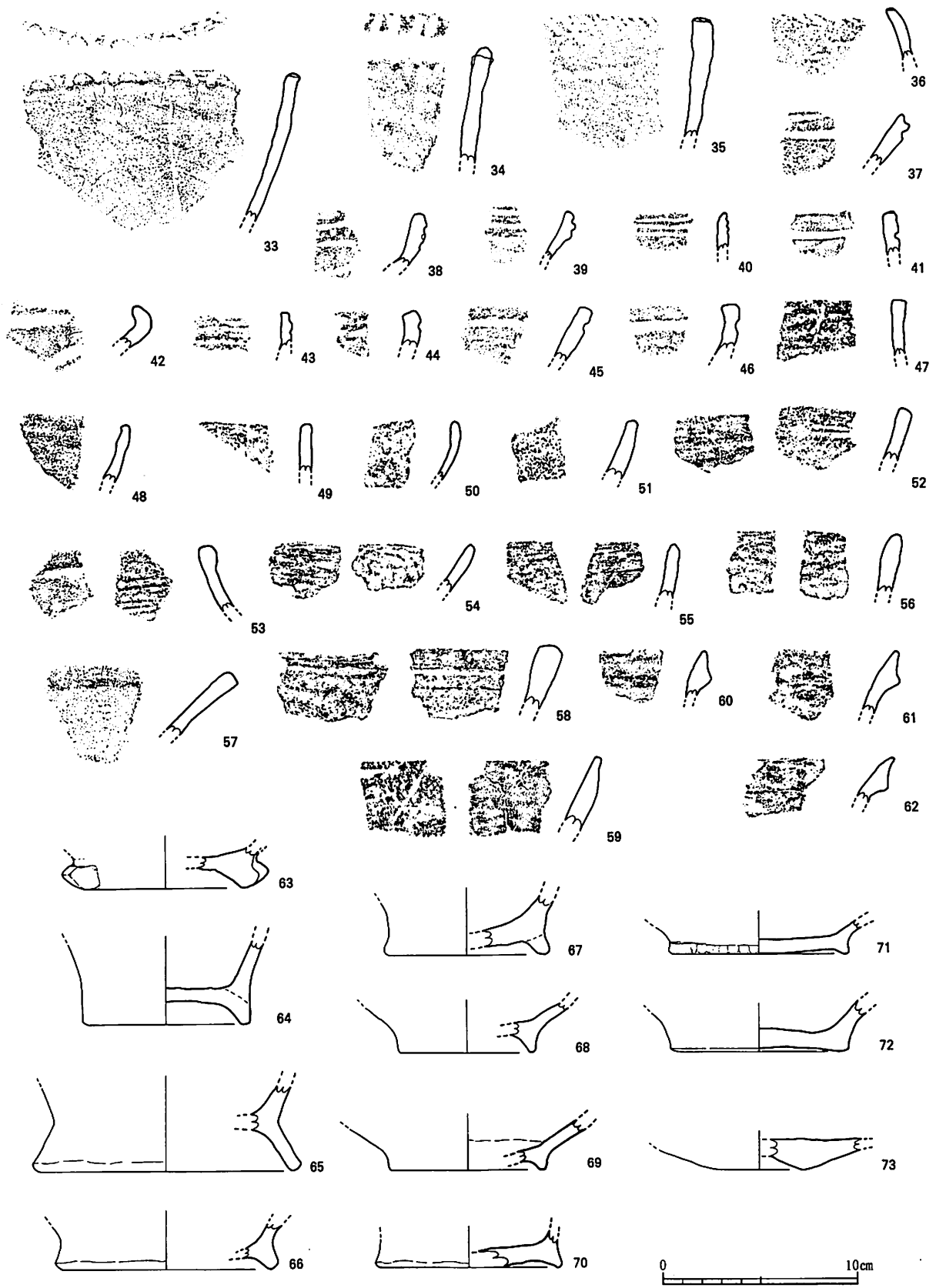
### 4 縄文時代

土器と石器が出土している。土器は有文土器と無文土器に分けることができる。また、石器については石鏃・石匙・石錐・抉入石器・スクレイパー・R.F.・剥片などがある。本来は包含層ないしは遺構が存在したと思われるが、一里塚を設置した時に破壊された可能性が強い。

#### A. 縄文土器

ここでは主として有文土器をとりあげるが、総体としては無文の粗製土器がかなりの量を占めている。有文土器は文様構成や調整の特徴などから6類に分類した。基本的には時間軸に沿うように分類したが、各類型がそのまま従来の形式に対応しているわけではない。

時期的には時間的な幅はあるものの縄文時代後期の土器で構成されている。大まかにはいわゆる磨消縄文を持つ一群・凹線や沈線で文様を構成する一群・肥厚した口縁部に様々な文様を施す縁帯文土器の一群にわけた。全体的な傾向としては文様の簡素化・省略化などが窺える。



第17图 出土遗物实测图(3) (1:3)

また、器種としては深鉢形土器と浅鉢形土器の2器種を確認でき、粗製品と精製品に分別できるが、土器の遺存状況などもあり判然としない部分が存在する。土器自体の遺存状態は江戸期に一回掘り出されたためか、器表面が概して脆かった。

#### 一類（第16図8，9・図版9）

いわゆる磨り消し縄文を持つ一群である。深鉢形土器（9）や浅鉢形土器（8）がある。縄文部と無文部を沈線やこれより太い凹線で区画している土器である。施文の順番は縄文→区画線→縄文磨り消し（ミガキ）となるものや無文部→区画線→縄文（充填縄文）などが存在する。区画線は直線的なものから曲線的なものまでさまざまに存在するが、モチーフを把握できるものは小片で個体数自体が少ないため、明確にできなかった。

#### 二類（第16図10～13，16，27・図版9）

口縁部が外側ないしは内側に著しく肥厚する縁帯文土器と総称されている一群である。肥厚した口縁部はおおむね波状をしており、端部には刻み目が施されている。いずれも深鉢形土器であると思われる。口縁肥厚部から垂下して把手を形成するものもある。遺存状況はいずれも不良である。

11は深鉢形土器であるが、外側に肥厚した幅広の口縁部外面に同心円文をモチーフとした沈線で文様構成をしているものである。中央部に円文があり、その周りを弧状の沈線が幾重にも対向して描かれており、12も同様の構成となっている。また、16のように文様集約部である波状口縁の波頂部に直径1.2cmの円形の押捺を施しているものもある。

10は波状口縁をもつ浅鉢形土器で、波状部の頂点に文様集約部を形成する。口縁部は内側に肥厚しており、口縁部の外面には細かなRLの縄文が、肥厚部は2本の沈線で区画され、この幅狭の区画に外面と同じ原体を使用したと思われる細かなRLの縄文が施されている。口縁からやや下方に焼成前に内側からの直径7mmの穿孔がある。

#### 三類（第16図14，15，19～26・図版9）

口縁部が肥厚せずに沈線や凹線で区画を構成するもので、直線的で幾何学的な文様構成になると思われるものである。多くは深鉢形土器と思われるが、なかには14のような浅鉢形土器になると思われるものも存在する。口縁は平縁（15，17～19）や波状をなすもの（14，20）など、いくつかのバリエーションが存在するようである。

14は波状口縁をもつ浅鉢形土器の口縁部から胴部付近の破片である。文様集約部である波頂部に刻み目をつけている。文様は沈線による曲線で構成されている。17のように平縁の口縁の外面に爪形文のような寸詰まりの連続刺突文をめぐらせるものもある。また、21～26のように凹線で幾何学文様を描くものもある。これらは接合部はないが胎土や色調などからいずれも同一個体になるとと思われる胴部片である。



#### 四類（第16図28～32・図版9）

口縁部外面に端面を作り出しこの端面に短沈線を縦位方向に刺突文風に連続して施すものである。波状口縁のもの（28, 29）や平縁口縁のもの（31, 32）がある。29は頸部から緩く外反して伸びる口縁部端に上方に拡張した端面を作り出しており、立ち上がりは垂直に近い。31, 32は若干肥厚した端面に縄文を施文したものである。

#### 五類（第17図33～36・図版9）

口唇部に刻み目をもつもので、胴部から直立気味に立ち上がって口縁部に至る比較的単純な器形になると思われる深鉢形土器である。いずれも平縁の口縁部を持つ。口唇部の刻目は器体の真上から見ると「八」字形に交互に向きを換えて施されているもの（33）や同一の向きで一定の間隔を置いて施されているもの（34～36）などがある。

#### 六類（第17図37～46・図版9）

口縁部に並行する沈線ないしは凹線を持つもので、その多くは深鉢形土器であると推定できるが、いずれも小片のため全形を窺い得ない。沈線の中に円文を押捺したもの（38）や、幅狭の沈線を多条化したもの（40）もある。口縁部の文様構成としてはかなり単純になっているが、いずれも小片のため全形を窺い得ない。

#### その他の土器（第17図47～73・図版9）

無文土器と底部を一括した。47～62は無文土器の類である。52は内外面共に貝殻条痕で調整されている。粗製の深鉢形土器が大半を占める。大半は平縁であるが、中には51のように波状口縁をなすものもある。小片のものが多く器形については推定の域を出ないが、基本的なプロポーシオンは有文土器とほぼ同じであろうと思われる。

63～73が底部である。底部にもいくつかのバリエーションがあり、高台が付くもの（63～69）、平底のもの（70～72）、凹底のもの（73）に分けることができる。量的には高台が付くものが多く、平底・凹底は少ない。さらに、高台を持つものには高台が比較的低いもの（66～69）と高いもの（64, 65）に細分できる。調整や色調および胎土の共通性などから64は五類の33と同一個体と思われるが、具体的にそれぞれの底部がどの類に所属するのかは不明な部分が多い。

#### B. 石器

石器は石鏃・石匙・スクレイパー・抉入石器・二次加工のある剥片（R.F.）・剥片などが出土している。石材としては安山岩製がほとんどであるが、少し白濁した黒曜石製のもの（77, 83）や石英製のもの（99）も数点出土している。ツールがほとんどで石核や碎片は見当たらず、剥片も極々少量出土したのみであった。これらの石器は縄文土器と混ざって出土しており、出土地点は縄文土器の出土地点と重なっている。

#### 石鏃（第18図74～99, 101, 102・図版10）

石鏃は基部形態と形状から4類型に分類した。1類＝基部が深く抉られて脚を形成するもの（74～78, 84, 89）、2類＝基部の抉りが比較的浅いもの（79～83, 85）、3類＝基部の抉りの浅いあるいはないもの（86～88, 90～93）、4類＝長さ比べて幅が大きなもの（94～98）、5類＝特殊な形状をするもの（99, 101, 102）の5つの形態である。大きさや重量では小型、中型、大型にわかれる。形状的には二等辺三角形をなすものが多く、まれに正三角形のものが存在する。大半は脚部や先端部が欠損している。

99は石英製の石鏃で、基部が未加工部分を残しており、今回出土した石鏃の中でも大型品の部類に入る。

#### 石錐（第18図100・図版10）

1点出土している。先端部を少し欠いているが、断面は丸くなっており、直接あるいは柄のようなものに装着して、使用したと思われる。

#### 石匙（第19図104・図版10）

縦型の石匙が出土している。抉り部分の調整は背腹両面から微細な剥離を繰り返しながら丁寧に仕上げている。刃部の作出は背面からの調整剥離による。ほぼ全周すると思われるが、先端部を欠損しているため不明である。

#### 抉入石器（第19図105・図版10）

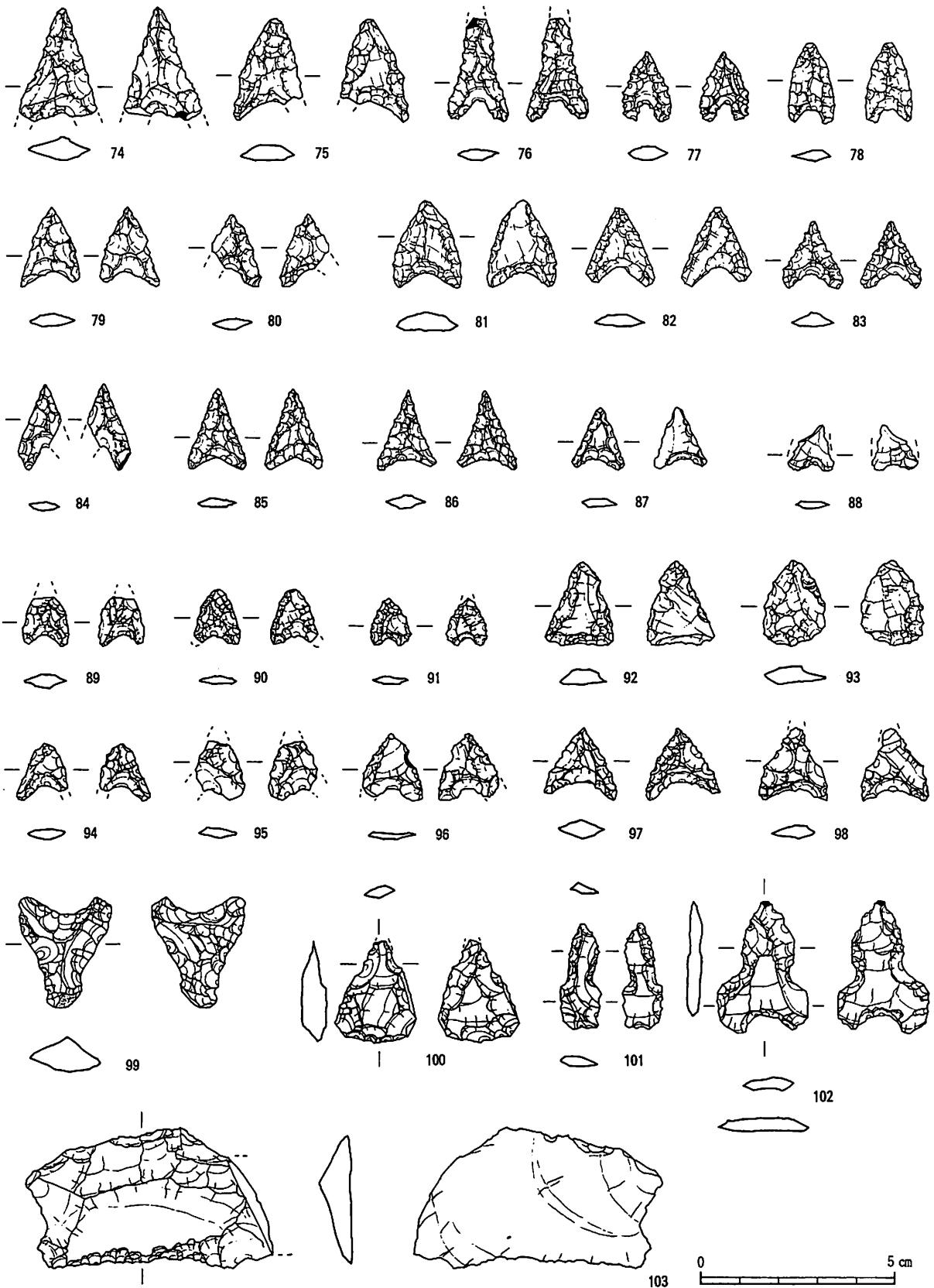
抉りの入った石器である。石匙のような規格性はないが、両側面を腹背両側から細かな剥離を施して抉りを作成する。刃部は主に背面から調整剥離しており、剥片の形状に合わせて調整したため全体的に半月状をしている。

#### スクレイパー（第18図103, 第19図106～108・図版10）

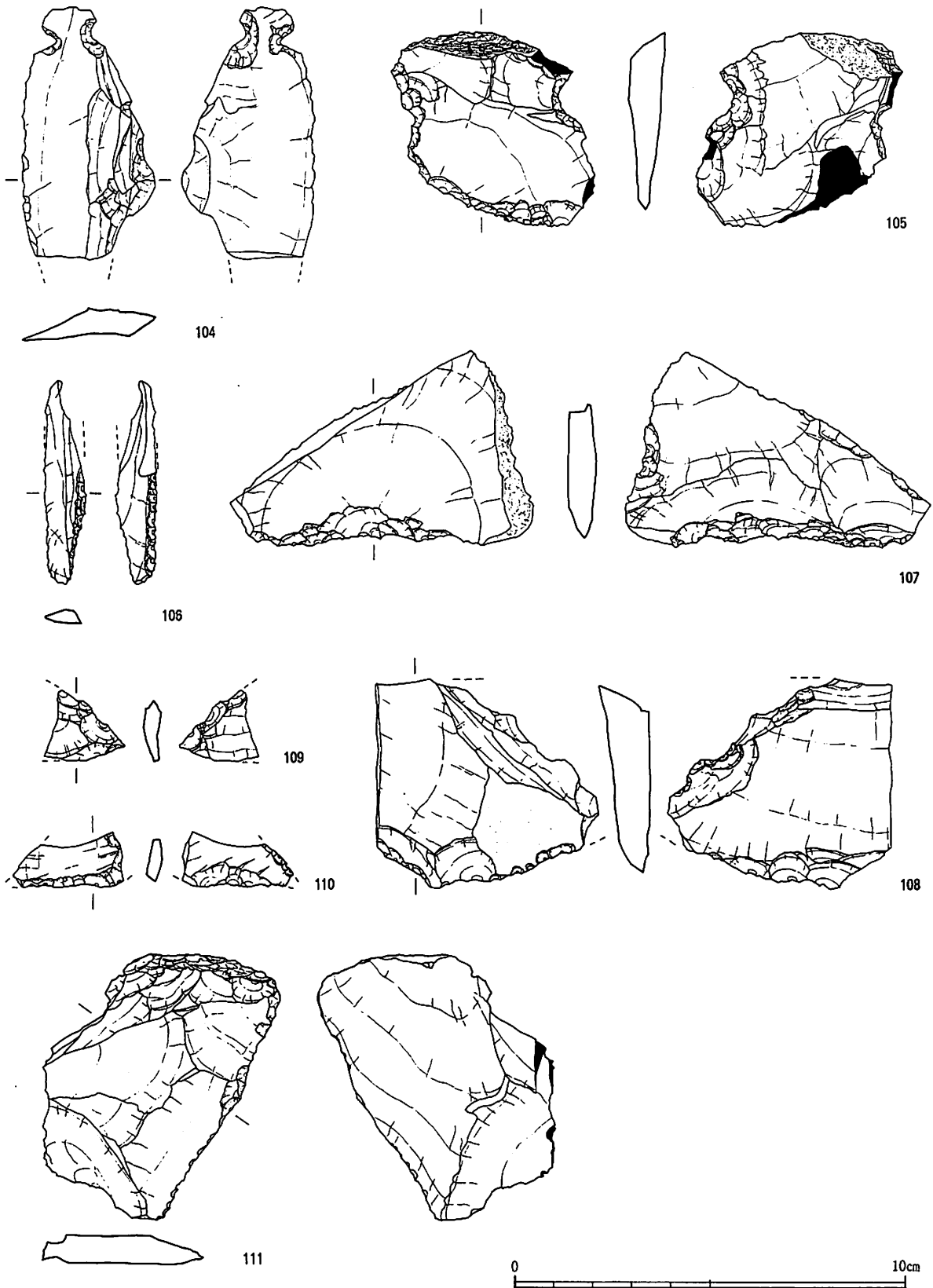
4点出土している。106以外はいずれも比較的大きな剥片を素材として刃部調整剥離を施している。106は石匙の先端部分の可能性もある。107は刃部を背腹両面からの調整剥離により作出しており、剥片の背面の打点を潰してそこを刃部としている。なお先端部を欠出している。また、108は素材の先端部分を調整剥離して刃部を作成している。

#### 二次加工のある剥片（R. F.）（第19図109～111・図版10）

明確な刃部を持っているわけではないが、部分的に二次加工の痕跡を残している剥片が3点存在する。うち2点は折損した小片で、微細な剥離痕を側縁に止めている。大半を欠失しているので全形については不明である。111は不定形な形状を呈しているが、側縁部に微細な剥離痕を止めている。



第18图 出土遗物实测图(4) (2:3)



第19图 出土遗物实测图(5) (2:3)

表1 土器観察表

番号	部位	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	遺存状況	出土地点	備考
7	口縁部～胴部	淡黄褐色	平行叩き+ハケ目	同心円叩き	良好	普通	北塚下層	須恵器甕, 復原口径194mm
8	口縁部	黄褐色	RL, 磨り消し縄文	条痕文+ナデ	普通	普通	南塚	浅鉢
9	胴部片	淡黄褐色	沈線	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚北東盛土	
10	口縁部	淡茶褐色	RL, 磨り消し縄文	ヨコナデ	良好	良好	北塚盛土	浅鉢, 内側からの穿孔あり
11	口縁部	黄褐色	?	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚北東盛土	深鉢, 波状口縁, 口唇部刺突文
12	口縁部	黄褐色	条痕文	貝殻条痕文	良好	普通	南塚表探	口唇部刺突文
13	口縁部	黄褐色	沈線	?	やや甘い	不良	南塚下層	深鉢, 把手
14	口縁部	淡茶褐色	沈線+ナデ	ナデ	良好	良好	南塚畦内	口唇部刺突文
15	口縁部	淡黄褐色	?	?	良好	不良	南塚畦内	口唇部刺突文
16	口縁部	黄褐色	沈線	?	普通	不良	表探	
17	口縁部	淡黄褐色	RL+爪形文	?	やや甘い	やや不良	南塚北西下層	深鉢
18	口縁部	淡黄褐色	ヨコナデ+沈線	条痕文+ナデ	良好	普通	南塚西側	口唇部刻目文
19	口縁部	淡茶褐色	ヨコナデ+条痕	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚畦内	
20	口縁部	淡黄褐色	沈線+ミガキ	ヨコナデ	普通	普通	南塚北東盛土	浅鉢, 波状口縁
21	胴部片	黄褐色	沈線+ナデ	ナデ	普通	良好	南塚平坦部	
22	胴部片	淡黄褐色	沈線+ナデ	条痕文	普通	普通	南塚畦内	
23	胴部片	黄褐色	沈線	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚北東盛土	
24	胴部片	黄褐色	沈線+ナデ	ナデ	普通	普通	南塚盛土	
25	胴部片	黄褐色	沈線+ナデ	ヨコナデ	普通	普通	南塚盛土	
26	胴部片	淡黒褐色	沈線	?	やや甘い	不良	南塚畦内	
27	口縁部	淡茶褐色	凹線+ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	東端部下層	深鉢, 波状口縁
28	口縁部	淡黄褐色	RL+沈線, ナデ	ヨコナデ	普通	普通	東端部下層	深鉢, 波状口縁
29	口縁部	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	やや不良	北塚盛土	波状口縁, 口唇部刻目文
30	口縁部	暗赤褐色	ヨコナデ+条痕文	条痕文	普通	良好	東端部下層	深鉢, 波状口縁
31	口縁部	明橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	普通	東端部下層	
32	口縁部	淡黒褐色	RL, ナデ	ナデ	良好	普通	東端部下層	
33	口縁部	淡赤橙色	ナデ	ヨコナデ	良好	普通	南塚下層	口唇部刺突文
34	口縁部	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	南塚西側表探	口唇部刻目文
35	口縁部	淡赤褐色	ヨコナデ	条痕文+ナデ	良好	やや不良	南塚北東盛土	口唇部刻目文
36	口縁部	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚西側平坦面	
37	口縁部	黄褐色	沈線	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚西側	
38	口縁部	淡黄褐色	沈線+円形文	ヨコナデ	良好	普通	南塚北西下層	浅鉢
39	口縁部	淡黄褐色	沈線	ヨコナデ	普通	やや不良	表探	
40	口縁部	黄褐色	沈線	ナデ	普通	やや不良		
41	口縁部	淡黄褐色	ヨコナデ+沈線	条痕文	良好	普通	南塚平坦部	
42	口縁部	淡黄褐色	?	ヨコナデ	やや甘い	不良	南塚畦内	浅鉢, 波状口縁
43	口縁部	淡黒灰色	刺突文	ヨコナデ	良好	普通	南塚下層	
44	口縁部	明黄褐色	沈線	ヨコナデ	普通	やや不良	東端部下層	
45	口縁部	淡黄褐色	条痕文+凹線	条痕文	やや甘い	やや不良	南塚北西盛土	
46	口縁部	淡黄褐色	沈線+ヨコナデ	条痕文	良好	普通	南塚北東下層	
47	口縁部	淡黒褐色	条痕文+ヨコナデ	条痕文	良好	普通	南塚南西	深鉢
48	口縁部	淡灰褐色	条痕文	ヨコナデ	良好	普通	北塚盛土	浅鉢?
49	口縁部	黄褐色	?	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚南西	
50	口縁部	黄褐色	?	ヨコナデ	良好	普通	北塚盛土	浅鉢
51	口縁部	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	普通	南塚盛土	深鉢, 波状口縁
52	口縁部	淡黒褐色	条痕文	ヨコナデ	良好	普通	東端部下層	
53	口縁部	淡黄褐色	ヨコナデ	貝殻条痕文	普通	やや不良	南塚北西盛土	
54	口縁部	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ+ミガキ	良好	普通	東端部下層	
55	口縁部	淡黄褐色	条痕文	条痕文	良好	普通	東端部下層	
56	口縁部	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	東端部下層	
57	口縁部	淡灰褐色	貝殻条痕文	条痕文	良好	普通	南塚北西盛土	浅鉢?
58	口縁部	淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	東端部下層	深鉢, 波状口縁
59	口縁部	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	普通	東端部下層	
60	口縁部	淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	南塚下層	
61	口縁部	淡黄白色	ナデ	ヨコナデ	やや甘い	やや不良	東端部下層	
62	口縁部	淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	普通	東端部下層	

番号	部位	色 調	調整 (外面)	調整 (内面)	焼 成	遺存状況	出土地点	備 考
63	底部	淡黄褐色	?	ヨコナデ	普通	やや不良	南塚畦内	復原底部径89mm, 若干多角形状
64	底部	淡赤橙色	?	ナデ	良好	普通	南塚下層	底部径86mm, 凹底, 33と同一個体?
65	底部	淡黄褐色	?	?	普通	やや不良	南塚北東盛土	復原底部径138mm
66	底部	淡黒褐色	?	ナデ	良好	やや不良	東端部下層	復原底部径104mm
67	底部	淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ	良好	普通	北塚盛土	復原底部径106mm
68	底部	赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	南塚畦内	復原底部径70mm
69	底部	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	普通	南塚北東盛土	復原底部径80mm
70	底部	淡黄褐色	ナデ	ナデ	良好	普通	南塚平坦部	復原底部径96mm
71	底部	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	普通	普通	南塚北東盛土	底部径92mm, 貼付高台
72	底部	淡黄褐色	ヨコナデ	ナデ	普通	やや不良	東端部下層	復原底部径92mm
73	底部	淡黄褐色	ナデ	ナデ	普通	やや不良	南塚北西盛土	復原底部径46mm

表2 石器計測表

単位はmm, 重量はg

番号	器 種	長 さ	幅	厚 さ	重 量	石 材	出土地点	備 考
74	石鏃	29	20	6	1.89	安山岩	南塚畦内	両脚欠損
75	石鏃	27	17	4	1.49	安山岩	南塚北西盛土	片脚欠損
76	石鏃	26	16	3	0.81	安山岩	南塚北東盛土	頂部欠損
77	石鏃	18	13	3	0.52	黒曜石	南塚北東盛土	
78	石鏃	20	12	3	0.64	安山岩	東端部下層	
79	石鏃	21	15	3	0.7	安山岩	南塚南東下層	
80	石鏃	19	13	3	0.4	安山岩	南塚北西盛土	片脚欠損
81	石鏃	22	18	4	1.38	安山岩	南塚北東盛土	
82	石鏃	21	18	3	0.81	安山岩	北塚北	
83	石鏃	17	15	3	0.52	黒曜石	南塚北西盛土	
84	石鏃	22	11	2	0.43	安山岩	南塚北東盛土	
85	石鏃	20	15	2.5	0.5	安山岩	南塚北西盛土	
86	石鏃	20	16	3	0.57	安山岩	南塚北西下層	
87	石鏃	16	14	2	0.39	安山岩	南塚北西盛土	
88	石鏃	12	12	2	0.2	安山岩	南塚北西盛土	頂部欠損
89	石鏃	12	12	3	0.42	安山岩	南塚南西下層	頂部欠損
90	石鏃	14	12	2	0.27	安山岩	南塚南西下層	
91	石鏃	12	11	2	0.24	安山岩	南塚平坦面	頂部欠損
92	石鏃	21	18	4	1.52	安山岩	南塚下層	未製品の可能性あり
93	石鏃	22	16	4.5	1.46	安山岩	南塚北西盛土	未製品の可能性あり
94	石鏃	19	14	3	0.41	安山岩	東端部下層	
95	石鏃	15	13	3	0.51	安山岩	東端部下層	
96	石鏃	17	16	2	0.45	安山岩	東端部下層	
97	石鏃	18	19	5	0.84	安山岩	南塚下層	
98	石鏃	18	17	3.5	0.9	安山岩	東端部下層	
99	石鏃	28	24	9	4.12	石英	南塚南東下層	
100	石鏃	26	20	5	3.28	安山岩	南塚北西盛土	
101	石鏃	34	23	3	2.57	安山岩	南塚南西盛土	異形石器
102	石鏃	27	10	3	0.38	安山岩	南塚北西盛土	異形石器
103	スクレイパー	33	64	8	16.14	安山岩	東端部下層	
104	石匙	64	34	6	14.38	安山岩	南塚畦内	刃部下半欠損
105	抉入石器	49	52	8	22.78	安山岩	南塚南東盛土	
106	スクレイパー	51	11	4	1.89	安山岩	南塚北西盛土	頭部欠損
107	スクレイパー	49	77	7	26.79	安山岩	北塚平坦部盛土	
108	スクレイパー	53	57	13	37.93	安山岩	南塚平坦面	半欠
109	R. F.	18	21	4.5	1.24	安山岩	南塚北西下層	
110	R. F.	14	29	3	1.42	安山岩	南塚南東下層	
111	R. F.	67	47	7	29.65	安山岩	南塚南西盛土	

※表中, 出土地点の項目で東端部は2001年度の調査区である。

## 5 まとめ

近世山陽道は江戸時代の主要な街道の一つである。今回の調査ではこの街道と街道に付随して設置された一里塚を調査した。便宜上、前章では個々の遺跡として分離して記述したが、街道と一里塚は本来は一体不可分の関係にあるのは言うまでもない。そこでここでは主として一里塚と街道の関係について若干の考察を試み、まとめとする。

### (1) 街道の様子 (第20図)

調査地点付近の街道の様子は前章でも記したように、竹原からの傾斜の緩い坂道を越えて、比較的なだらかな平坦な道が暫く続き、一里塚の辺りで再び坂道になっている。この坂道は松子山峠まで続き、そこからは長い坂道となり、本一里塚よりも一つ西にある歌謡坂一里塚（現在は痕跡なし）あたりから再び平坦な道となり、宿駅の一つである四日市へと続いている。

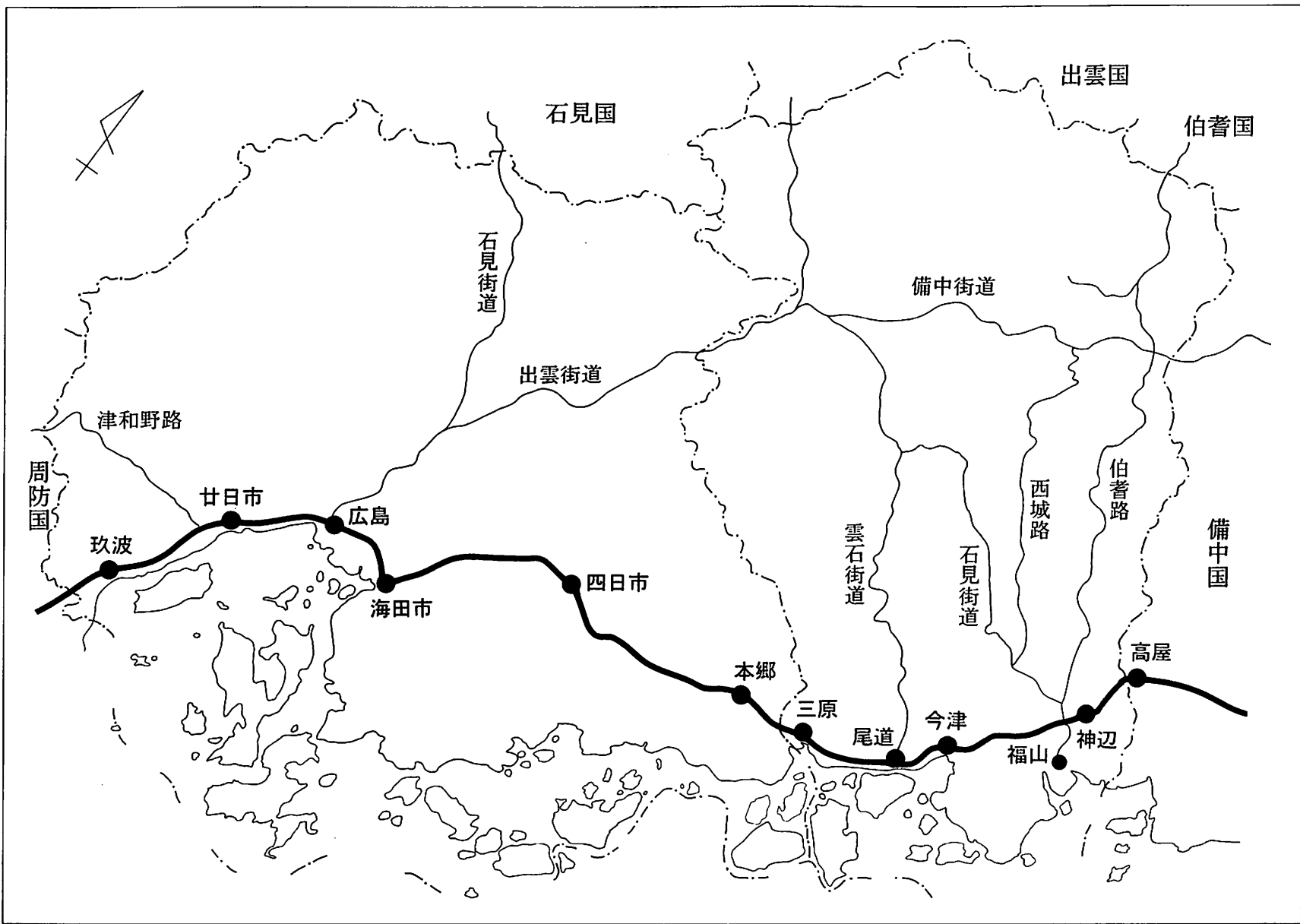
ところで四日市付近の宿駅は西は海田市、東は本郷（茅の市）となっており、各宿駅間の距離は海田市－四日市間で五里半＝21.6km、四日市－本郷間で6里＝23.6kmである。藩内の西国街道沿いの宿駅の間隔は、東から順に神辺－一里半（約6km）－今津－二里（7.9km）－尾道－三里（約11.8km）－三原－二里半（9.8km）－本郷－六里（23.6km）－四日市－五里半（21.6km）－海田市－二里（約7.9km）－広島－一里四町（約4.4km）－廿日市－二里（約7.9km）－玖波であるから、これらに比べると随分長くなっていると言える。

当時の旅行者の一般的な一日あたりの歩行距離は男性が9～10里（35～39km）、女性で6～8里（23～31km）という試算<sup>(1)</sup>があり、これを連日のように歩くのであるから、歩く機会が減った現代人に比べると遥かに健脚であったことを示している。その江戸時代の健脚をもってしても旅程のとり方にもよるが、この3つの宿駅のどれかに宿泊する可能性は極めて高いといえよう。またこの道程は山間部を縫うように通る上り下りの多い道でもあることから、実際に歩く距離はこの里程よりも増えるものと思われる。

このルートは現国道2号線と一部は重なりあるいは交差するようになっているが、おおまかにはほぼ並行するルートとなっている。このルートは狭小な谷沿いに街道が続いているので、両側に山が迫っており、周囲の風景を見渡せる状況ではない。少なくとも上三永周辺の田園風景を望むことはできない。松子山峠を降りて視界が開けるのは歌謡坂一里塚付近からで、三永水源地方面が全く視界から遮断されている。これは意図的なものであると思われるが、少なくとも政治的な意味合いを抜きにしても同ルートと現2号線での四日市までの距離を比較すれば確かに現2号線を通るよりはこのルートの方が短い。

### (2) 一里塚

北塚と南塚の2基一組で一里塚を形成する。例えば、藩内の地勢・地理について記載した『芸藩通史』の絵図面（上三永村）では一里塚は中央やや上に道を挟んで対峙して表現されており、塚の中央部に植えられている塚木が表示記号として描かれている。このように2基一組で塚を形



第20图 西国街道行程图



成するのは当時の街道沿いの一里塚の一般的な姿である。したがって、この2つの塚に挟まれた間が本来的な道幅であると言えなくもない。事実、『芸藩通史』によれば西国街道＝近世山陽道の道幅は2間半との記載があり、本一里塚の間の距離が正にこの記述に符合するように造られているところを見れば、少なくとも整備した当初の一里塚の周辺ではこの道幅であったことが窺えるのである。

さらに塚について見てゆくと北塚は塚周りに貼石が全周している。使用した貼石は大小さまざまであるが、街道に面した部分では大ぶりの礫を丁寧に使っている。対して街道の反対側は貼石がめぐるのは巡るのであるが申し訳程度の大きさの礫を使っており、街道に面したところと面していないところでは見栄えに大きな差がある。このことは明らかに正面観としての街道を意識しており、街道の反対側は背後に急傾斜の山の斜面が迫っているためか、それほど意識していないようである。このことは部分的だとはいえ石列を検出した南側の塚にも当てはまると思われ、道路側を強く意識して一里塚を構築した様子が窺えるのである。

一里塚の周辺には南北共に平坦面が一里塚を中心として街道に沿って細長く伸びている。この平坦面は自然の地形を利用して街道建設に伴って削りだされた施設と思われ、一里塚周辺に適当な空間を創出している。一里塚自体が道程の目印であると同時にこの周囲は一時の休息を求めるにも程よい空間であったと思われ、想像の域を出ないが、現在で言うところの「パーキングエリア」的性格を担っていたのかもしれない。

### (3) 位置

さて以上、一里塚と街道の関係を見てきたわけであるが、街道の状況や周辺の地勢や地形などを勘案すれば一里塚の設置された場所は、必ずしも四日市から二里を測るわけではないが、およそその距離としての二里であることに変わりはない。一つ西側にあったとされる歌謡坂一里塚の位置なども、どちらかと言えば距離を正確に示すよりは、行程としての区切りを示しているように思える。すなわち松子山峠を挟んで坂道から平坦に移り変わるまさにその道程の地形が変更する絶好の位置に設置されたと考えられ、一里塚の設置に当たっては実地見聞等による用意周到な意図が汲み取れるのである。

註

- (1) 金森教子『江戸庶民の旅』 平凡社新書 2002年

a 近世山陽道跡2000年度  
調査前（西から）



b 同上検出状況（西から）



c 同上検出状況（東から）





a 近世山陽道跡2001年度調査前（南から）



b 同上検出状況（東から）



c 近世山陽道跡2002年度検出状況（東から）

a 日向一里塚調査前（北から）



b 同上北塚調査前（南から）



c 同上（東から）





a 日向一里塚北塚検出状況  
(南から)



b 同上 (東から)



c 同上調査風景 (南から)

a 日向一里塚北塚検出状況  
(南から)



b 同上(南西から)



c 同上(南東から)





a 一里塚南塚調査前（北から）



b 同上検出状況（北から）



c 同上石列検出状況（北から）

a 石立炭窯跡現状 (南から)



b 同上検出状況 (南から)



c 同上煙道部 (南から)







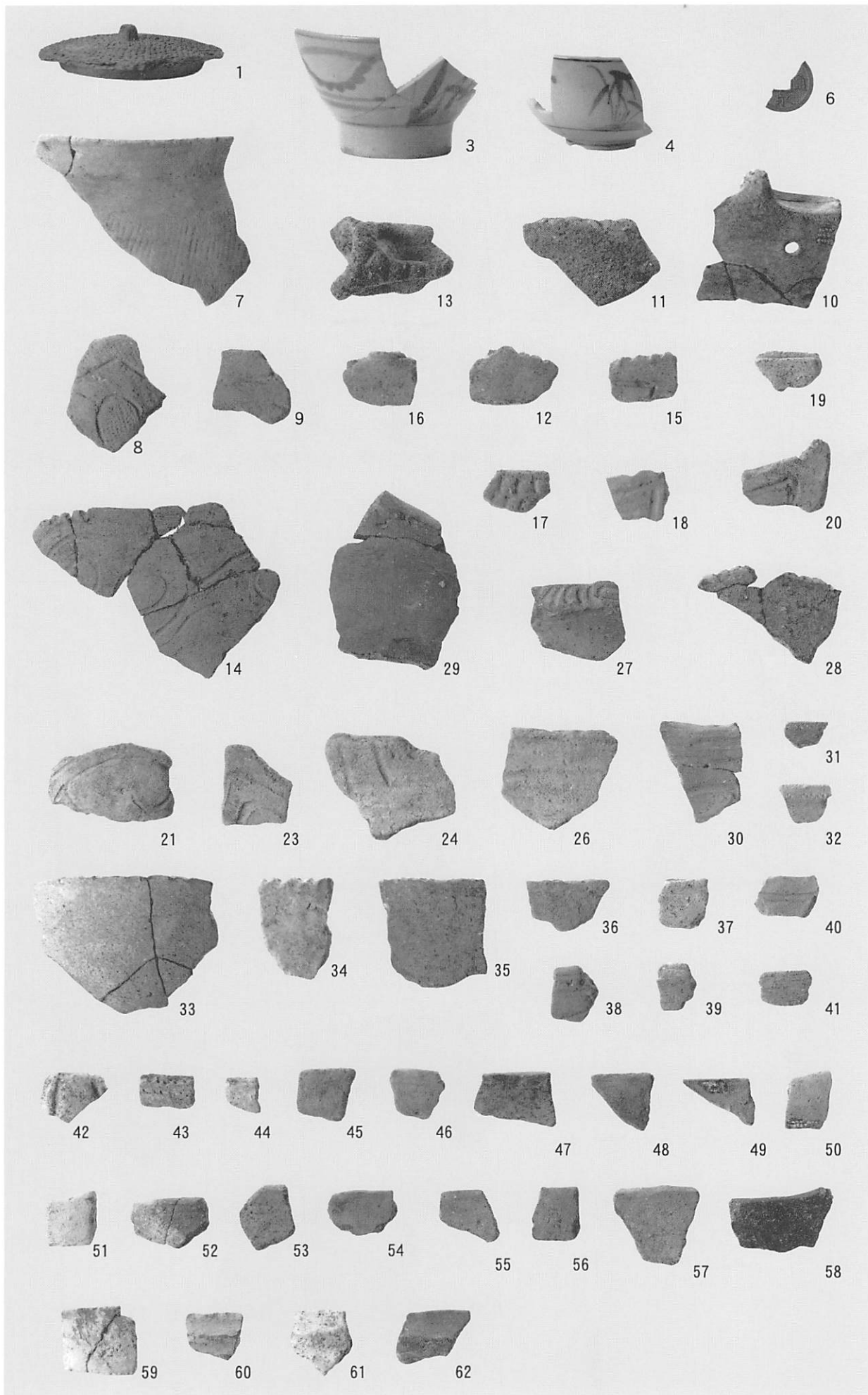
a 石立炭窯跡煙道部（南から）



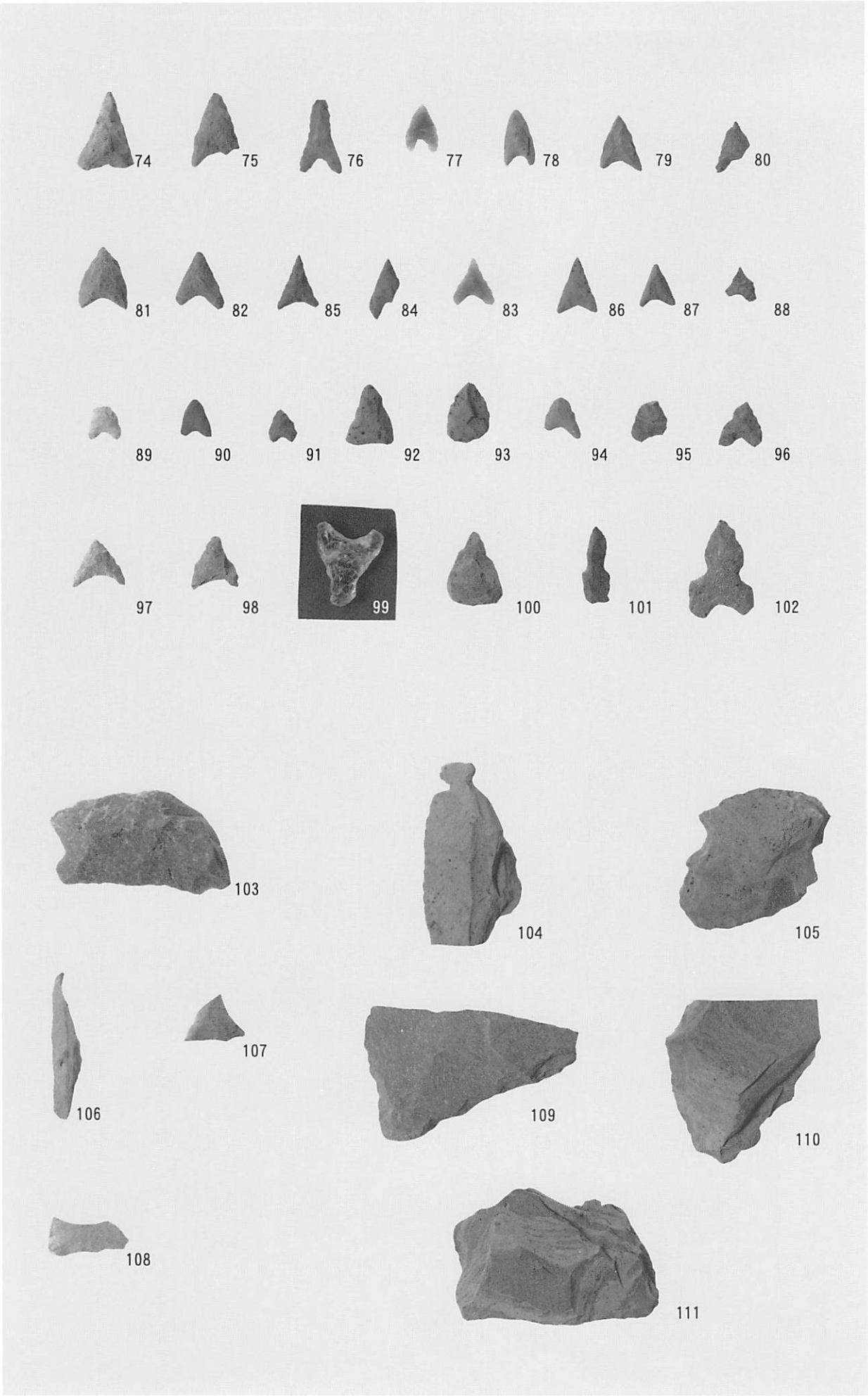
b 同上(南から)



c 同上完掘状況（南から）



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	きんせいさんようどうあと・ひゅうがいちりづか・いしだてすみがまあと							
書名	近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡							
副書名	東広島呉自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編集者名	辻 満久							
編集機関	財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号							
発行年月日	西暦2003年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
近世山陽道跡	広島県東広島市 西条町上三永	34212	885	34° 20' 00"	132° 48' 00"	20000724 ～ 20001027 20010827 ～ 20011005 20021111 ～ 20021227	2200	東広島呉 自動車道 建設事業 による
日向一里塚跡	広島県東広島市 西条町上三永	34212	885	34° 20' 20"	132° 48' 04"	20000724 ～ 20001027	800	
石立窯跡	広島県東広島市 西条町上三永	34212	886	34° 20' 21"	132° 48' 05"	20001023 ～ 20001027	10	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
近世山陽道跡	交通 遺構	近世	道路跡	縄文土器・須恵器			道路幅 3～4.5m	
日向一里塚跡	交通 遺構	近世	貼石	縄文土器			2基一組 北塚径 6m	
石立炭窯跡	窯跡	中世?	炭焼窯				石積煙道部	

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第1集  
**近世山陽道跡・日向一里塚・石立炭窯跡**  
東広島県自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

発行日 平成15(2003)年6月30日

編集 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室  
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号  
TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951

発行 財団法人 広島県教育事業団  
〒733-0011 広島市中区基町4番1号  
TEL (082)228-8451 FAX (082)228-8441

印刷所 大和印刷株式会社